四十周年記念誌

40th Anniversary Commemorative Publication

一般社団法人　日本リハビリテーション工学協会

Rehabilitation Engineering Society of JAPAN

目次

四十周年記念式典　式次第 …… 1

40 周年記念にあたって（会長挨拶） …… 河合　俊之　2

日本リハビリテーション工学協会設立の経緯とエピソード …… 末田 統　3

RESJA40 周年を期して、我が回想と期待 …… 田中　理　11

リハ工学を学び遂行してきたこと …… 松尾　清美　14

日本リハビリテーション工学協会の法人化について …… 相良　二朗　18

RESJA の想い出 …… 繁成　剛　24

リハビリテーション工学との出会いとその後の関わり …… 沖川　悦三　28

協会 40 周年にあたり …… 桂　律也　31

協会のあゆみ①　リハ工学カンファレンス …… 35

協会のあゆみ②　協会誌特集一覧 …… 39

協会のあゆみ③　福祉機器コンテスト受賞作品・後援協賛団体一覧 …… 43

協会のあゆみ④　役員経験者 …… 57

協会のあゆみ⑤　災害対策委員会 …… 58

協会のあゆみ⑥　国際連携推進委員会 …… 59

協会のあゆみ⑦　SIG　内部化 …… 60

協会のあゆみ⑧　賛助会員 …… 61

一般社団法人日本リハビリテーション工学協会　四十周年記念式典
第 40 回リハ工学カンファレンス in 神戸

テーマ「リハビリテーション工学の未来を考える」

日時：2026 年 8 月 21 日（金） 16 時から 18 時
会場：神戸学院大学ポートアイランド第 1 キャンパス D 号館 D201 教室

第 1 部： 開会

1. 会長あいさつ　河合　俊宏
2. 40 周年記念ロゴマーク最優秀賞　表彰　彦根　正　氏（東京）
3. 功労者への感謝状贈呈　および　挨拶

繁成　剛　氏
沖川　悦三　氏
桂　律也　氏
井村　保　氏
金井　謙介　氏
水澤　二郎　氏

4. 功労企業への感謝状贈呈

株式会社今仙技術研究所	株式会社オーエックスエンジニアリング
オットーボック・ジャパン株式会社	日進医療器株式会社
株式会社カワムラサイクル	川村義肢株式会社
株式会社モリトー	東名ブレース株式会社
株式会社松本義肢製作所	中村ブレイス株式会社
株式会社大武・ルート工業	

第 2 部　記念講演　　講演テーマ：「協会の設立から 40 年、今後に向けて」

登壇者　相良　二朗　氏（長崎）

・クロストーク「リハビリテーション工学の未来を考える」

リハ工経験年数、立場違う方々から，リハ工学が思い描く課題や未来を，ベテランエンジニア，功労者、障害当事者を交えて想いを語る．

・ファシリテーター：相良　二朗　氏（記念講演者）

パネリスト：功労者全員

鈴木　太　氏（電動車いすユーザー）
植田　瑞昌　氏（企画研修担当理事）

・意見交換

・まとめ

◆記念式典　閉会の言葉　植田　瑞昌

40 周年記念にあたって（会長挨拶）

一般社団法人　日本リハビリテーション工学協会
代表理事（会長）　河合俊之

日本リハビリテーション工学協会設立から 40 周年となりました。

これまで協会に関わってこられた多くの皆様に、まずは感謝を申し上げます。

協会は設立から 10 年を一つの節目とし、記念事業を行ってきました。

今回は第1回目の開催地であった神戸にて、第 40 回の「リハ工学カンファレンス in 神戸」が開催されます。カンファレンス期間中に、記念事業として設立 40 周年記念式典を開催します。式典は表彰式・シンポジウムの構成ですが、合わせて 40 周年記念誌を作成することにしました。

記念式典参加の方はもとより、当日会場への参加が難しい方や、アクセシビリティの点から、電子版で一般公開することを前提として、作成を進めてきました。これまで協会活動を外部より支えていただいた団体の方へも見ていただけるものになったと考えています。

まずは協会の歴史を振り返ることからはじめ、体制が変化してきた記憶を記録するために、設立時には世話人という名称から始まった、協会の代表の方に、世話人・理事長・代表理事（会長）の順で記事を投稿していただきました。続いて、これまでの事業のそれぞれも、年代ごとに記載をしてあります。現担当理事からも投稿させていただいています。

主たる事業であるリハ工学カンファレンスは、巷にある職能団体の集会や、学術団体の大会とは、趣旨が違っていることに、多くの協会員の皆さんは気づいていると思います。「現場」という表現も、各協会員によって違っていることにも再度気づき、よりよく進めていけるよう、これからもリハ工学カンファレンスをはじめとして、事業を展開していきたいと考えています。

今後につながる基礎資料として、本記念誌が活用されることを、期待します。

ありがとうございました。そしてこれからも、よろしくお願いします。

2026 年 8 月

日本リハビリテーション工学協会設立の経緯とエピソード

元世話人代表・初代理事長
徳島大学名誉教授 末田　統

日本リハビリテーション工学協会が 40 周年を迎え、これまでご尽力いただいた関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

協会設立に関係した一人として大変うれしく思うとともに、第 1 回リハ工学カンファレンスが神戸で開催され、第40回リハ工学カンファレンスが再び神戸で開催されたことに感激しております。

以下、協会設立当初の経緯と幾つかのエピソードをご紹介したいと思います。

世界の福祉機器は、戦争と共に発達してきた悲しい歴史があります。

1960年には、睡眠薬としてサリドマイドが発売され、その薬害によりヨーロッパとわが国で、四肢の欠損した障害児が多数誕生したことを受け、当時の厚生省はプロジェクトチーム（動力義肢の実用化研究）を発足させ、新たな義肢装具や生活用具の研究・開発が行われるようになり、東京都や横浜市、神戸市、その他の都市にも先進的なリハ研究施設（所長は、ほとんど整形外科医師）が整備され、リハエンジニアと呼ばれる人々が誕生しました。

小生は、当初〔1966（S41）年～〕、視覚障害者の福祉機器の開発を手掛けていましたが、サリドマイド児に対する義肢装具の開発にも関係して整形外科の医師や義肢装具士、義肢装具の会社関係者、特殊教育関係者、労災関係者、身体障害者、コミュニケーション障害者など、いろいろな方々と交流を持つようになり、スウェーデンや北欧の先進的な社会福祉の考えや社会システムに刺激され、わが国でも福祉機器に関する学会が欲しいと思うようになり、1985（S60）年11月に学会設立の準備を関西のリハエンジニアに提案しました。

時を同じくして、関東でもリハエンジニアの方々が発表の場を作りたいという発案があり、両者が集まって、以下のような経緯で日本リハビリテーション工学協会が発足しました。

日本リハビリテーション工学協会の誕生

1985（S60）年12月21日、10：30～12：50、名古屋市にある「労災リハビリテーション工学センター2Fの小会議室」に9名のリハエンジニアが集まり、「リハビリテーション工学研究会（仮称）に関する第１回検討会議」なるものが開催されました。

第2回会議は、1986（S61）年1月16日、13：00～ 17：00、東京都補装具研究所3F 研究室に6名が集まり、ここで、正式名称を「日本リハビリテーション工学協会（以下、「リハ工」という。）」に決定し、世話人代表を市川 冽と末田 統と決定しました。

第3回会議は、1986（S61）年2月14日、10：30～ 13：00、労災リハビリテーションセンター2F 会議室で開催され、8名が集まり、ここで第1回リハ工学カンファレンスに関する検討が始まり、会場は舞子ビラ（神戸市）とし、会期を1986（S61）年8月19日（火）～21日（木）の3日間とすることが決定しました。

第4回会議は、1986（S61）年5月29日、9：30～ 14：00、労災リハビリテーション工学センター2F 会議室で開催され、5名が集まり、第1回リハ工学カンファレンスに関する具体的なセッション等の詳細な計画が策定され、座長や時間配分も決定しました。

リハ工設立のプレス発表は3月1日でした。

第1回リハ工学カンファレンス開催

第1日目（S61/8/19） 参加登録者数：160名 （欠席 10名）、当日参加39名、 合計189名が参加。
昼間 約180名、ナイトセッション 約120名

第2日目（S61/8/20） 昼間 約140名、ナイトセッション 約100名

第3日目（S61/8/21） 昼間 約80名、 ナイトセッション 約60名となり、成功裏に終了しました。

設立当初の本協会の会員数（S61/8/18現在）

工学：70名、 医師：17名、 PT：26名、OT：29名 ST：2名、 MSW：3名、教育関係者：30名、指導員：11名、看護婦：2名、 福祉機関関係者：6名障害者：8名、 その他：33名の237名でした。

協会誌「創刊号」の発行

リハ工の事務局を兵庫県リハビリテーションセンター・義肢装具開発課内とし、協会誌 「リハビリテーション・エンジニアリング Vol.1、No.1 創刊号」を昭和61年10月1日発行しました。

創刊号は、全10ページで、世話人代表の「Rehabilitation Engineering発刊について」2頁、

第3頁目は「日本リハビリテーション工学協会の現在の状況について」、第4～6頁目は「第1回リハ工学カンファレンスを開催して」、第7頁目は「RESNAのご紹介」、第8頁目は「協会誌への原稿募集」、第9頁目は「リハ工学関連刊行物のご紹介」、最後の頁は「事務局からのお知らせ」でした。

福祉機器コンテストの開始

福祉機器コンテストは、愛知県名古屋市の「健康創造」を事業理念とする（株）スズケン様より、日本 ME 学会（名古屋市内開催）に参加の末田に、リハ工の事業に協力（協賛）の打診があり、1988（S63）年8月4日夕刻と9月に、（株）スズケン代表取締役社長の別所芳樹様と世話人代表2名（市川洌、末田 統）、事務局代表1名（奥 英久）が面談し、（株）スズケン様による5年間にわたる毎年300万円の「日本リハビリテーション工学協会主催のコンペティション」への助成が決定しました。その際、内容を権威あるものにしてほしい、賞にスズケンの名前は出さないでほしいとの条件がありました。

日本リハビリテーション工学協会第13回世話人会議〔1988（S63）10月26日〕において、賞の種類は、最優秀賞（1名、副賞30万円）、優秀賞（2名、副賞各10万円）、奨励賞（2名、副賞各10万円）、ユーザー賞（1名、副賞10万円）とし、賞状と上記副賞をリハ工学カンファレンス開催時に贈呈し、作品を展示することを決定し、さらに、審査委員は、（株）スズケンから1名、厚生省から1名、医師 1名、OT 1名、 PT1名、デザイン関係1名、福祉関連 1名、協会世話人代表2名とすることも決定しました。

その後、権威あるコンペとするため厚生省に審査員をお願いし、快諾を得て実現しました。

名称を「コンペティション」から「福祉機器コンテスト」に変更することは、1988（S63）年11月17日の第14回世話人会議で決定し、規則、募集要項、審査方法など細部の検討・決定は、1988（S63）年12月15日の第15回世話人会議で決定し、「最優秀賞」の名称を「グランプリ」に変更しました。

また、第1次審査を書類選考で行い、第2次選考では現物を持ち込んでの審査が行われることになり、より実際的な福祉機器コンテストとなりました。なお、（株）社スズケン様からのご支援は、諸般の事情により、第3回福祉機器コンテストで打ち切りとなり、その後、フランスベッド（株）様のご支援を得ましたが、（株）スズケン様からのご協力の提案・支援により、現在に続く当協会の「福祉機器コンテスト」の流れを作ることができましたことに対し、小生は、（株）スズケン関係者の皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。

ISO/TC173/SC4 の国内審議団体

1992年当時、国際規格ISO/TC173とTC168の国内審議引き受け団体は、日本リハビリテーション医学会（以下、「リハ医学会」という。）であった。

その「リハ機器委員会」の加倉井周一委員長から小生に、国内委員会参加の依頼が数回あり、参加しました（小生、リハ医学会の会員）。

1992年12月7日、加倉井周一氏から小生への手紙が届き、そこには、『TC/173/SC4の日本の対応を末田 統氏にお願いしたい（形式的にはリハ医学会「リハ機器委員会」、実質的にはリハ工学協会で検討していいただきたい。）』とありました。

ISO/TC173 には、当時、SC1（車いす）、SC2（用語と分類）、SC3（ストーマ・集尿器）、SC4（コミュニケーション機器）、SC6（リフター）の5つのSCがあり、SC4の中には、さらに、次のような8つの WG がありました。WG1（データ通信）、WG2（点字）、WG3（ブリスシンボル）、WG4（障害者補助機器ソフトウェア）、WG5（触知案内図と触図）、 WG6（歩行者のための触地図と聴覚・触覚記号）、 WG7（視覚障害者の歩行出口表示）、WG8（障害者用赤外線シグナル）です。

ISO の SC や作業部会（WG）への専門家（エキスパート）の派遣については、一会議一人に限定して、日本規格協会から旅費の半額が会議参加者に助成金として支給し、残りの半額については引き受け団体が助成することになっていました。しかし実際には、一つの会議に 2～3 人の専門家を派遣する必要があり、会議の回数が増えると会議参加者への国の助成金は底をつき、年度の後半には助成金が支給されない事態も発生していました。

リハ医学会からの資金助成もどこまで可能か不透明なため、SC4の国内受け入れ団体をリハ医学会から移管していただき、リハ工で資金集めをして対応するしかないということになり、多くの方々と（各省庁とも）対策を話し合いました。

その結果、リハ医学会からリハ工に国内審議団体が移行することになりました。

関係省庁（厚生省、労働省、通産省、建設省、総務省）を委員とする委員会（ISO/TC173/SC4 国内対策委員会）を立ち上げ、その活動を支える特別委員会（アクセス支援機器規格等検討委員会）を設置し、リハ工の一般会計とは別に財源を探し、特別会計（アクセス支援機器規格等検討委員会・事業維持登録会員の寄付金）

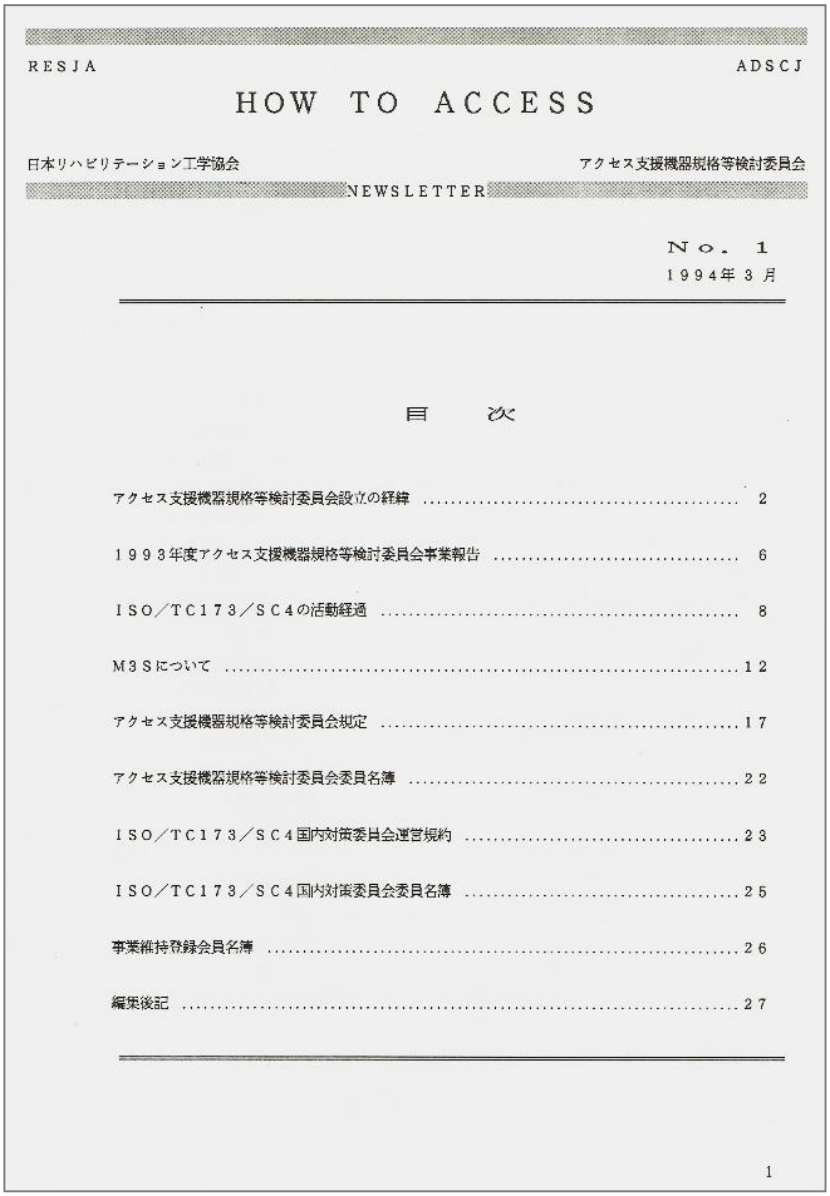
で運営することになりました〔第 32 回理事会決定、1993(H5)年 4 月23 日〕。

国際規格の活動については、ニュースレター「HOW TO ACCESS」を発行しました(第1図参照)。

これら委員会の立ち上げが成功したのは、ひとえに、我国の福祉6法全てに深くかかわられた、(社)ゼンコロ会長の調一興氏のご尽力によるものであります。

当初から委員長をお願いしましたが固辞され、小生が委員長となりましたが、厚生省ならびに経済団体連合会にも働きかけていただき、財政基盤と共に、各委員の指名にも成功し、ISO/TC173/SC4/WG6, 7の国際会議議長をISO事務局から指名され、活発なロビー活動と科学的なデータに基づく議論を重ね、ISO-23600:2007(音響信号機の国際規格)とISO-23599:2012(点字ブロックの国際規格)の作成に成功しました。

現 ISO/TC173の受け入れ団体は、日本福祉用具・生活支援用具協会(JASPA)になっています。



RESJA　ADSCJ

HOW TO ACCESS

日本リハビリテーション工学協会　アクセス支援機器規格等検討委員会

NEWSLETTER

No. 1

1994年3月

目　次

アクセス支援機器規格等検討委員会設立の経緯 …… 2

1993年度アクセス支援機器規格等検討委員会事業報告 …… 6

ISO／TC173／SC4の活動経過 …… 8

M3Sについて …… 12

アクセス支援機器規格等検討委員会規定 …… 17

アクセス支援機器規格等検討委員会委員名簿 …… 22

ISO／TC173／SC4国内対策委員会運営規約 …… 23

ISO／TC173／SC4国内対策委員会委員名簿 …… 25

事業維持登録会員名簿 …… 26

編集後記 …… 27

1

第 1 図　ニュースレター How to Access, No.1

アクセス支援機器規格等検討委員会委員（1993, 1994）

委員: 末田 統(委員長、鳴門教育大学)、 調　一興〔(社)ゼンコロ〕、

富岡義雄〔(株)アイシーエム〕、　三宅三郎〔(財)安全交通試験センター〕

一宮能和(一宮グループ)、　相川孝訓(国立身体障害者リハビリテーションセンター)

奥 英久（岡山理科大学）、　関 宏之（大阪市職業リハビリテーションセンター）

監事: 直木純二郎〔三菱商事(株)〕、　井手將文(労働福祉事業団総合せき損センター)

ISO/TC173/SC4 国内対策委員会委員（1993, 1994）

委員：末田 統（委員長、鳴教大）、相川孝訓（国リハ）、　淡路 均（運輸省）、

伊藤哲朗（警察庁）、　太田俊明（労働省）、　奥 英久（岡山理科大学）

加倉井周一（東京大学）、　加藤俊和（NLH）、　倉重有幸（通産省）、

佐藤信彦（建設省・道路）、　田内雅規（国リハ）、　田村至敏（建設省大臣官房）、

富岡 悟（厚生省）、　羽生洋治（建設省・住宅）、　村谷昌弘（日身連）

第15 回リハ工学カンファレンスの開催

第15回リハ工学カンファレンスは、小生が大会長で、徳島市の徳島県立郷土文化会館にて2000（H12）年8月25～27日に開催しました。

このカンファレンスでは、開会に先立ち、「心身障害児者家族の会」の音楽サークルによる楽器演奏が行われ、そののち開会式が執り行われました。

開会式に引き続き、世界の三大関連学会である北米リハビリテーション工学協会（RESNA）会長のマリー・ビニオン氏、欧州リハビリテーション工学協会（AAATE）会長のクリスチャン・ビューラー 氏、豪州リハビリテーション工学協会（ARATA）前会長のバリー・シーガー氏ならびに米国教育省障害研究所（NIDRR）国際プロジェクト担当のウイリアム・ピーターソン博士を招待し基調講演をしていただきました。

この企画には、基調講演以外に非常に大きなイベントが計画され、一年前から地道に準備が行われてきました。それが、8月26日に開催された国際連携の会議と国際連携同意メモ（いわゆる「徳島アグリーメント」）への調印式でした。

基調講演では、大会長の講演の後、経済産業省と厚生省の代表からの講演があり、海外からの招待者の講演が行われました。

1. 第15回リハ工学カンファレンス大会長 ： 末田 統

2. 経済産業省機械情報産業局医療・福祉機器産業室長 ： 荒木由紀子

3. 厚生省大臣官房障害福祉部企画課社会福祉推進室 ： 塩出博司

4. 米国教育省障害研究所 ： ウイリアム・ピーターソン博士

5. ARATA 元会長 ： バリー・シーガー

6. AAATE 会長 ： クリスチャン・ビューラー

7. RESNA 会長 ： マリー・ビニオン

15th Japanese Conference on the Advancement of Assistive and Rehabilitation Technology
JCAART2000 in Tokushima

日本リハビリテーション工学協会

第15回リハ工学カンファレンス

Supplement of Proceedings of JCAART 2000

基調講演録　Keynote Address

平成12年8月25日(金)　25th August, 2000
徳島県郷土文化会館　Tokushima-ken Kyodo Bunka Kaikan

1.…… 第15回リハ工学カンファレンスと国際連携会議 ……
JCAART 2000 and International Collaboration Meeting
末田　統　**Osamu Sueda**
第15回リハ工学カンファレンス大会長　Chairman of JCAART2000
日本リハビリテーション工学協会理事(国際担当)　Board for International Affairs of RESJA

2.…… 福祉用具産業政策とリハビリテーション工学 ……
Assistive Device Industry Policy and Rehabilitation Engineering
荒木由季子　**Yukiko Araki**
通商産業省機械情報産業局　Director, Medical and Welfare Equipment Industries Office,
医療・福祉機器産業室長　Machinery and Information Industries Bureau, MITI

3.…… 社会福祉構造改革と福祉用具 ……
Social Reconstruction and Assistive Device
塩出博司　**Hiroshi Shiode**
厚生省大臣官房障害保健福祉部　Office for Promotion of Participation in Society for Persons
企画課社会参加推進室　with Disabilities, Dept. of Health and Welfare for Persons
福祉機器専門官　with Disabilities, MHW

4.…… 支援工学・技術：米国における活動概要 ……
Assistive Technology : An Overview of Activity in United States
ウイリアム・ピーターソン　**William Peterson**
米国教育省障害研究所　National Institute on Disability and Rehabilitation Research

5.…… オーストラリアにおける支援工学・技術関連学・協会 ……
Assistive Technology Associations in Australia
バリー・シーガー　**Barry Seeger**
豪州リハビリテーション工学協会前会長　Past President of ARATA

6.…… ヨーロッパにおける支援工学・技術 ……
Assistive Technology in Europe
クリスチャン・ビューラー　**Christian Bühler**
欧州リハビリテーション工学協会会長　President of AAATE

7.…… 日本リハビリテーション工学協会と北米リハビリテーション工学協会：蒼生・連携・祝福の時 ……
RESJA and RESNA : A Time for Celebration, Collaboration, and Change
マリー・ビニオン　**Mary Binion**
北米リハビリテーション工学協会会長　President of RESNA

8.…… 徳島アグリーメント ……
Tokushima Agreement

第2図　第15 回リハ工学カンファレンス 基調講演録(Keynote Address) (対訳付)

この、「第15回リハ工学カンファレンス 基調講演録(Supplement of Proceedings of JCAART 2000 Keynote Address)」は、第16回リハ工学カンファレンス参加者に配布されました(第2図参照 ： 2001(H13)年6月10日発行、総ページ数74頁)。

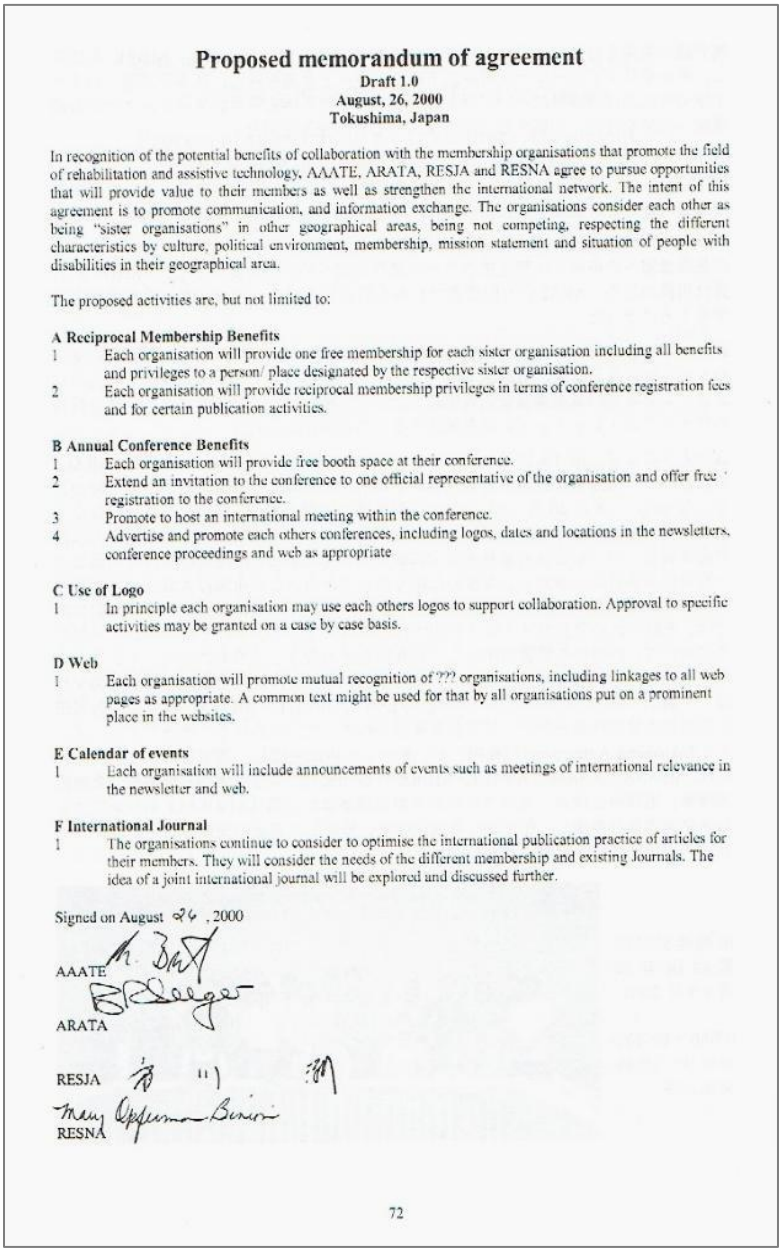
徳島アグリーメントの調印

8月26日(土)早朝(07:50～08:45)の国際会議は、協会役員だけでなく、一般会員にも公開するという新しい方式で開催しました。この企画は大成功で、本協会側参加者は21名にも達し、国際連携への意識の高さが示されました。

国際会議では、それぞれの会員のメリットを出すための方策として、それぞれのカンファレンスにおいて協賛団体としてお互いを認め合うというものから、インターネットを通じて情報交換するものまで議論になり、RESNA会長、AAATE 会長、ARATA 元会長と RESJA 国際担当の末田が同意書の策定作業を行い、いわゆる「徳島アグリーメント：Tokushima Agreement」が、その日の内に完成し、調印を終えました（第3図参照）。

これにより、海外のこれらリハ工学協会のカンファレンス参加は、それぞれのリハ工学協会員と同額の会費で参加が可能となりました。

また、「今後、それぞれの組織は、それぞれのカンファレンスにおいて無料のブースを用意し、代表者一人に対し招待状を出し、無料で登録をする。」ことになりました。



Proposed memorandum of agreement

Draft 1.0
August, 26, 2000
Tokushima, Japan

In recognition of the potential benefits of collaboration with the membership organisations that promote the field of rehabilitation and assistive technology, AAATE, ARATA, RESJA and RESNA agree to pursue opportunities that will provide value to their members as well as strengthen the international network. The intent of this agreement is to promote communication, and information exchange. The organisations consider each other as being "sister organisations" in other geographical areas, being not competing, respecting the different characteristics by culture, political environment, membership, mission statement and situation of people with disabilities in their geographical area.

The proposed activities are, but not limited to:

A Reciprocal Membership Benefits
1 Each organisation will provide one free membership for each sister organisation including all benefits and privileges to a person/ place designated by the respective sister organisation.
2 Each organisation will provide reciprocal membership privileges in terms of conference registration fees and for certain publication activities.

B Annual Conference Benefits
1 Each organisation will provide free booth space at their conference.
2 Extend an invitation to the conference to one official representative of the organisation and offer free registration to the conference.
3 Promote to host an international meeting within the conference.
4 Advertise and promote each others conferences, including logos, dates and locations in the newsletters, conference proceedings and web as appropriate

C Use of Logo
1 In principle each organisation may use each others logos to support collaboration. Approval to specific activities may be granted on a case by case basis.

D Web
1 Each organisation will promote mutual recognition of ??? organisations, including linkages to all web pages as appropriate. A common text might be used for that by all organisations put on a prominent place in the websites.

E Calendar of events
1 Each organisation will include announcements of events such as meetings of international relevance in the newsletter and web.

F International Journal
1 The organisations continue to consider to optimise the international publication practice of articles for their members. They will consider the needs of the different membership and existing Journals. The idea of a joint international journal will be explored and discussed further.

Signed on August 26, 2000

AAATE

ARATA

RESJA

RESNA

72

第3図　調印された「徳島アグリーメント」

第2図の基調講演録　第72頁（和訳　第73頁）

以上（末田 統）

RESJA40周年を期して、我が回想と期待

（一社）クオルトン研究所　代表
（社福）横浜市リハビリテーション事業団　顧問　田中 理

RESJA40 周年おめでとう。

1986 年 RESJA 設立発起人の一人として心からエールを送ります。

RESJA 設立のコンセプトは、科学、工学、技術をもとにリハビリテーションや生活支援に役立つ技術を開発し、必要とする個々人のニーズに応えられる実用的技術として転化、普及することを目的にして、異なる立場や分野の垣根を取り払い、関心のある誰もが自由に参加でき、議論し合える場とその成果を共有できる場を一緒に作って行きましょうというものであったと認識しています。一言で言えば、リハビリテーションや生活現場で実際に役立つ支援技術を一緒に作り上げて行きましょうということです。

私がリハ工学の世界に足を踏み入れたのは、大卒後就職した神奈川リハセンターの建設準備局時代に早稲田大学加藤一郎先生の研究室に入れていただき、アメリカのリハ工学について学び、その哲学をご教示いただいたことに始まります。1973 年同センター開設にあたりリハ工学研究室で車椅子とその利用者のための支援技術の研究開発に着手して以来、支援技術との関わりが私の生涯のテーマになりました。

1984 年 RESNA カンファレンスに参加し、アメリカのリハ工学の裾野の広さを肌で感じるとともに支援技術に関する率直な意見交換やその活動内容に大きな刺激を受けました。一番心に刻まれたものはアメリカにはリハ工学を共有する場があるという事実でした。その翌年に車椅子 ISO 会議に初参加し、コーリン・マクローリン、ダグラス・ホブソン両教授や当時若手研究者だったローリー・クーパー、ピーター・アクセルソン両名をはじめ欧米の車椅子研究者たちと顔見知りになりました。これらのことが私を RESJA 設立に向かわせる大きな原動力になりました。

RESJA 結成からしばらくの間はリハ工学って何？みたいな新鮮な期待感があり、RESJA の活動を順調に進められた印象があります。

私が大会長となり横浜で開催した 17 回カンファレンス（2002 年）では、それに先だって実施した車いす SIG 講習会に講師としてアメリカからローリー、ピーター、ジーン・ミンケル（PT）、ローズマリー・クーパー（PT；ローリーの奥様）の 4 名を招き、受講者と一緒に車椅子シーティング技術について深め合いました。ローリーにはカンファレンスの特別セッションでアメリカのリハ工学について講演してもらい、多くの参加者にリハ工学の視野を広げてもらうことができました。カンファレンスには 800 人を超える人が集い、太平洋を越えて RESJA が認知される良い機会になったと自負しています。このカンファレンスは横浜リハ、神奈川リハ、職能開発大、神奈川工科大などに所属する会員の協力を仰ぎオール神奈川の布陣で準備にあたりました。カンファレンス後に地元神奈川で日常的に交流できるリハ工学の場づくりに結び付けられなかったことを残念に思っています。

私が RESJA 理事長（2003～2007 年）の頃は、車いす SIG、姿勢保持 SIG、コミュニケーション SIG などRESJA の基盤である SIG 活動が活発で我が国の支援機器をけん引していた印象があります。この間、松尾清美大会長のもと 20 回カンファレンス（2005 年）が佐賀で開催されました。特別企画で RESNA 会長になっていたローリーを再び招き特別講演をしてもらいました。アメリカでは支援機器の国家規格の開発は RESNA が担っており、規格には ANSI/ RESNA の冠が記されます。RESNA は支援技術に関するアメリカ政府の諸政策にも深く関わっており、ローリーは超多忙にもかかわらず来てくれたわけです。会期中のある晩、クーパー夫妻、松尾大会長、私とで佐賀料理を囲みながら日米のリハ工学に話が弾んだことを鮮明に覚えています。アメリカの凄いところは ADA をはじめ障がい者自らが先頭に立って進めるパワフルな行動力と旺盛なフロンティア精神にあると、常々感服していたのですが、その凄さを改めて認識した機会になりました。

現役を退いた後、RESJA 活動がやや停滞しているのを耳にすることがあります。社会は流動変化するものですから、いつも順調に行くとは限りません。

RESJA の精神には普遍的な価値があります。変化に柔軟に対応して力を合わせて地道に活動していくことが大切と思います。この 40 年間、わが国では支援機器が量・質ともに進歩しました。RESJA がその一翼を担って来たことは疑う余地もありません。今後RESJA が目指す方向の一つに支援技術の更なる質の向上と技術の標準化の推進が上げられます。とりわけ近年の AI、IT、RT 技

術の発展には目覚ましいものがあり、支援技術の未来には明るいものを感じます。RESJA の原点を忘れずに、リハビリテーションや生活現場で実際に役立つ支援技術とは何かを愚直に見つめ続けて一歩一歩粘り強く前進してください。世界との連帯も心のどこか片隅に置いて取り組んでいただけたら最高です。期待しています。

リハ工学を学び遂行してきたこと

合同会社 KT 福祉環境研究所　松尾清美
2007 年 4 月～2010 年 10 月の法人設立前までの理事長

リハ工学協会 40 周年記念誌の発行にあたり、リハ工学に出会ってから現在までに行なってきたことをまとめ、今後のリハ工学の発展に期待することを記述したいと思います。

1. リハ工学に出会うまで

宮崎大学工学部機械工学科 3 年の 3 月 31 日、21 歳の時にテニスの合宿に行く途中の交通事故で脊髄を損傷し、車いすを移動の補助機具として使い始めて早くも 50 年が過ぎました。当初、大学への復学や寮の改造,実家の改造,就職活動などを家族の協力の基、手探りで生活方法を模索しながら2年間、主治医や PT, OT, MSW、そして車椅子の先輩、家族などの協力を得て、リハビリテーションに励み、その後の人生を再構築するための情報を集め、まず休学していた大学へ復学し、翌年卒業しました。この頃の心理的変化を図1に示しています。1979 年に開設した総合せき損センター医用工学研究室へ 24 歳で就職し、リハエンジニアへの道を歩むことになりました。

2. リハ工学を学ぶ職場の変遷

①1979 年～2003 年:総合せき損センター

機械工学の基礎を学んで卒業したばかりの私は、医用工学研究室で 24 年間、脊髄損傷者を中心として様々な身体障害者の生活用具と生活環境を調査し、個々の身体機能で本人が望む生活を如何に獲得できるか、その支援方法と支援技術の拡充に努めました。初期は、頸髄損傷者の生活環境調査から自立を促進や介助負担を軽減するための生活機器開発とその使い方や動作研究を様々な専門性を持った同僚と共に繰り返し多くの事例をまとめました。その結果の例として、多くの機器開発(特許 14 件)と住環境相談数 1050 件などを達成しました。また、支援した多くの相談者から道具や住環境を身体機能や生活方法に適合すれば、自立(律)生活を獲得でき、目的ある生活を獲得できることを学びました。その過程に於いて、身体障害者の自立(律)生活を支援するリハ工学に必要な調査方法や生活環境要素(図2)や設計開発手法(図3)、専門職共協働の住宅改造の流れ(図 4)などをこの期間に学びました。

② 2003 年～2019 年:佐賀大学医学部

2003 年 5 月に、父の認知症の発症を契機に、佐賀大学医学部附属地域医療科学教育研究センター福祉健康科学部門へ異動し、これまで培った身体障害者(児)の生活行動支援技術をまとめ、その後の研究を通して医師や看護師,セラピストへの教育方法の構築を第一の目的とし、且つ福祉機器や補助機具の開発と生活環境設計手法の構築を第二

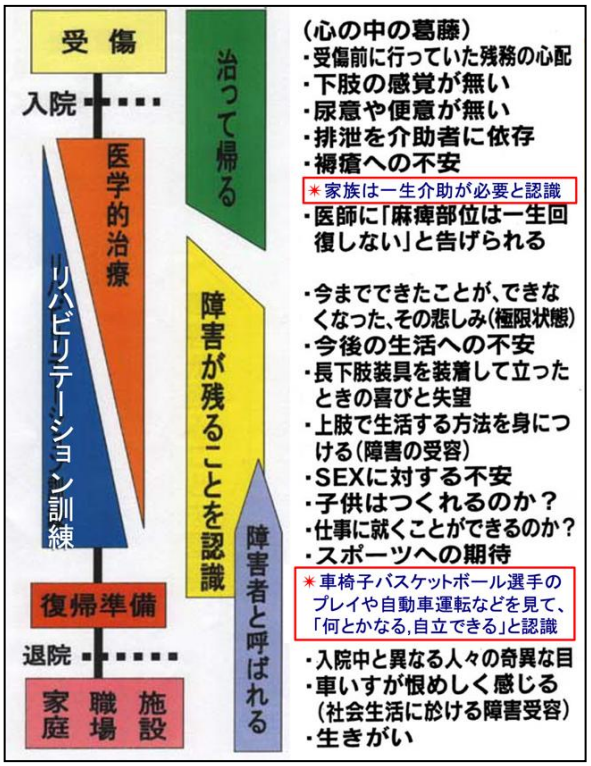


図 1 受傷後の身体の回復と心理的

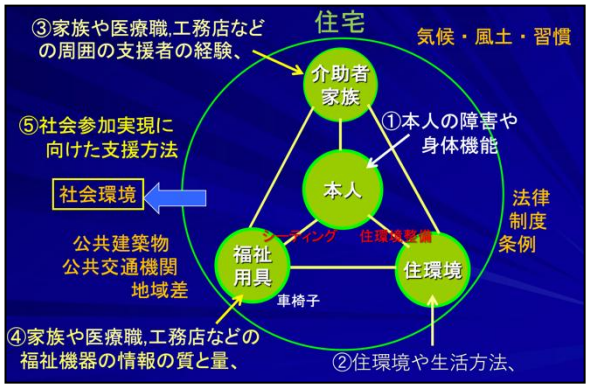


図２　生活環境要素

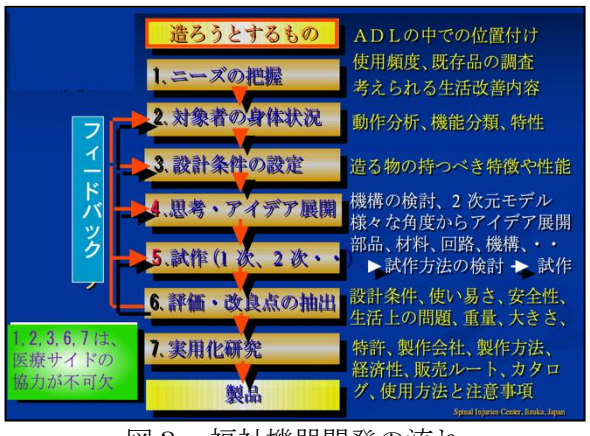


図３　福祉機器開発の流れ

の目的として、医学部の社会生活行動支援部門のリハビリテーション医工学分野を立ち上げ、教育と研究開発、そして相談者支援をリハ科や附属病院各科と協力して患者さんの生活行動支援を行いました(図5)。また、企業との共同研究体制(図6)を作り契約を多数結んで生活機器や福祉住環境の設計方法などの開発に努め、機器開発(特許 29 件)と住環境相談数 950 件などを行いました。

この期間では、移動補助器具などの福祉機器を備えた支援室(図7)で、高齢者や難病者、障害児など身体に障害があるため生活に不便を感じている人々の生活現場の調査を通して、生活動作の解析と動作指導に加え、福祉機器開発企業の開発相談も多くあり、産学官連携による福祉機器の開発や実用化、モニタリング研究を多数行いました。

大学院教育では、修士課程の修了者 PT3名,OT2名，エンジニア3名の修了者、博士課程では 2 名が博士となり、それぞれ活躍しています。

③2019 年～現在:同)KT 福祉環境研究所

佐賀大学を退官後は、佐賀県立金立特別支援学校に支援室を移し、大学で支援していた重度障害児の支援を行いはじめ、職員の家族などの高齢者や身体障害者の相談を学校の教職員の協力を得て 5 年間継続しました。この期間、これまで開発してきた図8に示す機器(子供用の車椅子や電動移動遊具、起立補助機、膝あて移乗器、自動車運転補助装置、律動運動マシーンなど)の適合や試用を通して、子供達の笑顔をたくさん見ることができました。

2024 年に、支援室を(株)山口新建木材センターリファイン佐賀の2階に移動し、図9の福祉住環境支援センターで住環境支援と福祉機器開発支援を継続しています。1979 年から 2026 年までの支援総数は、11,000件程で、特許は48件、住宅改修の相談件数は2060件となりました。

3. リハ工学を学べる SIG 活動とカンファレンス

私は、車いす SIG や住まいづくり SIG，移乗機器 SIG，乗り物 SIG の立ち上げから参加して、同じ興味を持った様々な専門職の方々から様々な有意義なことを学びました。

①車いす SIG に於いては、車いす工学の基礎や応用について多くの議論と検討会などを通じて学ぶことができ、その後の相談者へのシーティングや車椅子の適合・開発などに大いに活かすことができました。

②移乗機器 SIG では、車椅子とベッド間や浴槽の移乗方法を中心として、移乗ボードやシート、介護リフトでの移乗介助方法や吊り上げ式リフトと吊具の選び方・使い方などについて、リフトと吊具を集めて比較検討会を開催して、激しい論議をしながらまとめていきました。これらが、後のベッドの開発や移乗機器具の開発の基礎となっています。

③住まいづくり SIG では、脊髄損傷者の住環境設計が主体であった私の経験に加えて、SIG メンバーの様々な経験と対応障害と生活方法の違いによる設計施工方法の違いな

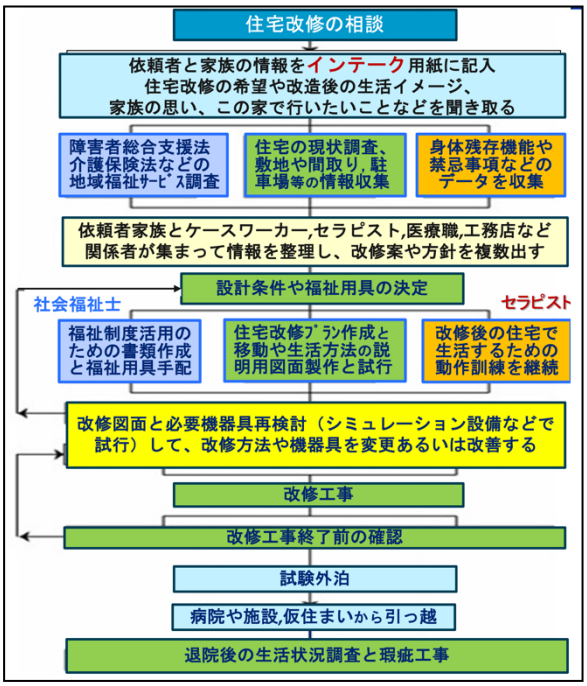


図 4 .専門職協働による住宅改造相談の流れ

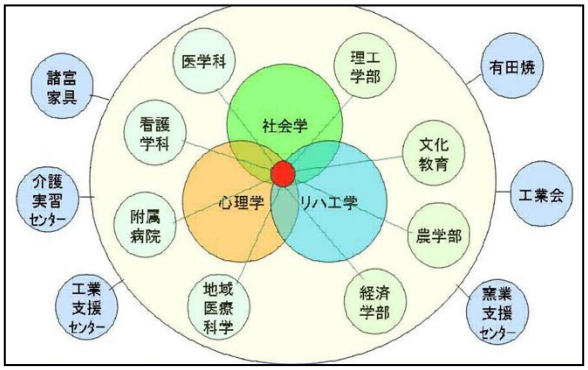


図 5.　大学での各部門との協力体制

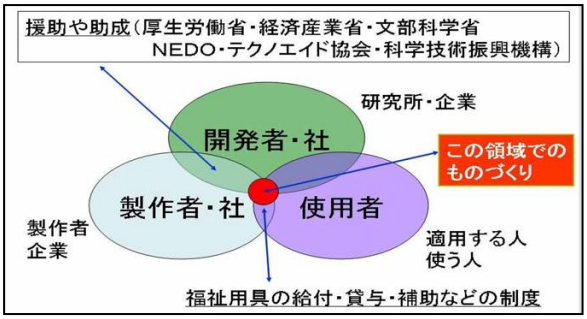


図 6.　企業とのものづくり協力体制

図 7.　大学での動作解析支援室

どを学ぶことができました。
④リハ工学カンファレンスには、大学院の試験日と重なり参加できなかった1回を除いて、初回から大学を定年退職するまで、毎年参加しました。実行委員も3回行いました。研究発表に関しては、毎年、複数題の研究発表（福祉機器や住環境や設備機器の開発、障害者の生活動作解析、調査研究、支援方法などに関する）をしていました。大学院に於いて、研究論文の査読や指導などに大いに役に立ちました。
⑤その他の学会や研究会
　様々な学会や研究会でもリハ工学を学べるし、活かすことができると考えています。

4．会社で行なっているリハ工学を活かした活動
　リハ工学を活用して様々な日常生活機器具を開発し上市してきた私の“ものづくり＝工学”を考えると、図11のように示すことができます。私の基礎工学は機械工学で機構学や熱力学を学んでいます。総合せき損センター医用工学研究室で研究を始め、建築士免許を取るために建築工学を学び、リハ工学協会と障害者支援から学んだ福祉工学、そして大学院で学んだ人間工学などを集積した開発経験が現在の会社で行なっている以下の事業に活かされていると考えています。
①企業を対象とした福祉機器開発相談事業
　相談会社の得意とする技術を活かした福祉機器の共同開発や指導、コンサルタント活動を行なっています。企業との福祉機器開発の流れは図3に示しており現在も同様の方法で行っています。
②障害者や高齢者、難病者からの相談事業
　福祉住環境支援センターに相談に来られる身体障害者（児）や家族からの相談（車椅子などの補装具、日常生活用具などの申請方法や入手方法、使い方相談、適合相談など）です。相談内容を達成するため生活動作や生活方法、住環境調査、本人と家族の考え方などの聞き取りを行い、支援室にある機器具で試したり、使えそうな機器をメーカーから借りて試行します。また、上手く使うために既存品を改良して適合させることもあります。住宅改造相談の流れもセラピストなどの協力を得て、図4に示した流れで進めています。
③寝たきりを防ぎ拘縮や変形を無くす支援事業
福祉機器とその使い方に関する情報や住環境改善方法に関する情報は、大変大切です。なぜなら、福祉機器の情報や選び方・使い方を知らないことに加え、身体障害に対する認識が昔ながらの「障害を持ったらお終い」とか「歩けなくなったら寝たきり」というような古い考えを当たり前と思っている人が多いために、寝たきりになって、拘縮や変形を起こしている人がたくさんいるからです。拘縮と障害のを持つことの間違った認識を無くすための支援事業を一般社団法人こうしゅくゼロ推進協議会と進めています。拘縮を無くすための過緊張を与えないケアとして７つの方法を示しています。この7項目をチェックしてケアして欲しいものです。

図 8.　大学で開発した機器具の例

図 9.　現在の支援室（福祉住環境支援センター）

- 福祉住環境コーディネーター協会（理事）、
- 日本障害者スポーツ学会（理事）、
- 日本義肢装具学会（国際化委員）、
- 日本脊髄障害医学会、日本リハ医学会、日本人間工学会、福祉のまちづくり学会、日本建築学会の正会員
- ケアリフォームシステム研究会（CRS）現在：顧問

図 10.　これまで参加した学会や団体

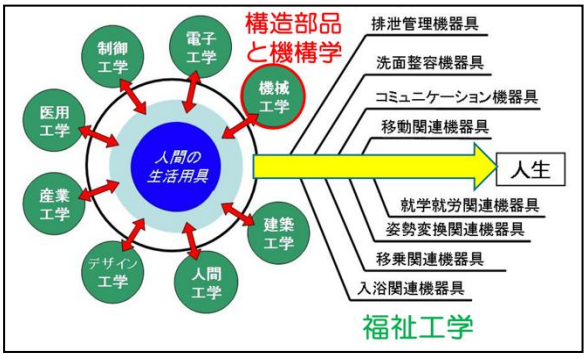


図 11.　人間の生活用具の開発
（ものづくり＝工学）

5. リハ工学協会に期待すること

人間は高齢化して身体障害を持つことは他人事ではないこと、福祉機器や住環境を整備して使用することで、身体障害が現れても自立(律)生活できることや納税者を増やすことができることなどを理解したリハ工学協会会員の様な支援技術を持ったリハビリテーションエンジニアを育成して、発展させて行かれることを期待しています。

図 12.　こうしゅくゼロ推進協議会が進めるケアの内容

日本リハビリテーション工学協会の法人化について

神戸芸術工科大学 名誉教授
一社）日本リハビリテーション工学協会 顧問
相良二朗

1. はじめに

日本リハビリテーション工学協会創立 40 周年おめでとうございます。

当協会の運営に携わってこられたすべての代表理事、理事、監事、事務局のみなさま、当協会の活動を盛り上げていただいた会員のみなさまに感謝申し上げます。

私は、会員番号 100005 という、協会創立時からの会員であり、2008 年度から 2014 年度まで理事を務め、一般社団法人化を担当し、2011 年度から 2014 年度までは代表理事でしたので、40 周年を機に当時のことをご紹介させていただくとともに、少し勝手な思いを書かせていただきます。

2. 法人って何?

法人とは法の下の人格という意味で、人間ではないけれども、法律の上で「人」と同じように権利や義務を有する存在のことです。つまり、法律によって作られた架空の人のような存在のことで、学校（学校法人）、 病院・診療所（医療法人）、宗教団体（宗教法人）、会社などがあります。少し特殊なものとして、ある目的を共有する集団に対して法人格を与える社団法人と、ある目的達成のための財産の集合体に対して法人格を与える財団法人があります。また、NPO 法人と呼ばれる特定非営利活動法人があります。

以前は、社団法人や財団法人の設立は制限されており、各主務官庁が裁量権をもち、法人設立を「許可」し、その法人を「所管」 する仕組みで、いわゆる天下りの温床ともなっていました。2006 年に新しい社団法人と財団法人の制度に関する法律が施行され、1896 年（明治 29 年）から 110 年間続いた制度に大幅な民主化改革が行われました。つまり、2006 年以前は、我々のような社会的な課題の解決を目的とする集団が法人格を目指すことは NPO 法人以外に選択肢はありませんでしたが、社団法人化が手の届く目標となりました。

法人の権利には契約を結ぶ権利があり、義務には納税の義務があります。また、個人が住民登録を行うのと同様、法務局への登記という手続きが義務となります（登記を完了することで法人として認められます）。つまり、何を達成しようと企図しているのか、誰が代表者でどのような構成なのか、どのような規則で運営しようとしているのか、本拠地はどこにあるのか、など法で定められた内容を記した定款というものを作成し、公証人による定款認証を受けた上で法務局に登記を届け出て、それが受理され登記事務が完了するとめでたく法人となります。

3．なぜ法人化に向かったのか

面倒な手続きをして法人にならなくても何も問題は無いのでは、法人になると義務が課せられるなどと、余計なことと考える人も多いかもしれません。なお、登記をしていなくとも、団体としての活動は「権利能力なき社団」あるいは「人格なき社団」として扱われ、収益は課税の対象となります。つまり、権利はないけど義務はあるということです。法人化の利点として権利としての契約を結べることを取り上げてみましょう。

あるときから、預金口座の開設が厳格化され任意団体での口座開設が難しくなりました。これはマネー・ロンダリングやテロ資金供与対策として、2007 年に「犯罪による収益の移転防止に関する法律」が施行され、しばらくの期間は金融機関が厳密に対応していました。人格なき社団では代表者個人の印鑑で個人の口座として（たとえ口座名義に団体名があっても）扱われ、万々一にその人がいなくなってしまうと金融機関での本人確認ができなくなり、最悪口座が凍結されてしまいます（少額ならATM やネットバンクでの引き落としや振替は本人がいなくてもできますが）。実際の取り扱いがどのようになるのかは経験したことがないのでわかりません。また、事務局が移転したり、代表者が交代したりするといった際には口座を作り替えることも必要でした。もっとも、コロナ禍以降は金融機関の窓口対応の縮小が進み、DX と相まってネットバンキングでできる手続きが増えています。また、事務所の賃貸契約や事務機器のリース契約、公共団体との事業受託契約など、法人格があることでスムースに実施できることが多くあります。それなりに歴史のある団体ですので、これまでお付き合いがある相手とは法人格がなくても進めることはできたでしょうが、新規の案件では一々説明が求められます。

法人化前に某一部上場企業に勤める友人に当協会の賛助会員になって欲しいとお願いしたことがありますが、そのとき、「あなたの団体は法人格がないので、稟議を上げられません。法人格がない団体は総会屋と同じように扱われてしまいます。」と言われました。断るための方便だったのかもしれませんが、法人格をもつことで、ちゃんとした団体として社会に認められるのだと痛感しました。

当協会がより社会に対して貢献していくには、法人格を有する責任ある団体として存在するべきと考え、2008 年度に理事会にて法人化検討委員会を設置して検討を重ね、2009 年度の総会での承認を得て法人化に向けた具体的な作業に着手しました。

4．なぜ NPO でなく一般社団法人だったのか

2006 年の法改正以前にも民間の非営利活動組織として NPO 法人が 1998 年に施行された「特定非営利活動促進法」によって規定されていました。NPO 法人は地域に根差した活動を基本としており、事務局の所在地である都道府県知事あるいは指定都市の市長が活動を認証し、監督を行います。また、この法では「不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与することを目的とするもの」と活動が規定されており、会員個々の利益追求（会員個人の知識の獲得や会員相互の情報交換など）は法の趣旨からは逸れると判断される恐れもありました。個人的に兵庫県での NPO 設立に携わった経験から、NPO 法人に対する認証と監督は法人登記よりも大変だと感じていましたし、一般社団法人の方が社会においての立場も良いかと思っていました。もちろん、当協会には縁のない財産の集合体である財団法人は真っ先に除外していました。

なお、社団法人には収益事業を行わない公益社団法人と、収益事業を行える一般社団法人が規定されています。公益社団法人には活動に対して寄付を受けた場合に寄付者は所得控除を受けることができるというメリットがあります。しかし、一般社団法人よりも厳格な運営が求められ、営利活動への制限等が課せられます。法人運営のコストや認定までの手続きの煩雑さなど大きな障壁が存在しているため、将来的には公益社団法人を目指しつつ、一般社団法人となる道を選択しました。

5．法人化への道

法人化検討委員会は、前述したような議論を重ね、理事会へ報告しました。

2009 年度総会での法人化事業計画を承認いただいた上で、定款案を作成し理事会承認の後、2010 年度の総会において一般社団法人設立を承認いただきました。それを受けて設立発起人会となる法人設立時社員を公募し、10 月 16 日の設立時社員総会にて定款を定め、11 月 4 日に公証人による定款認証を受け、事務局所在地を所管する横浜地方法務局に登記を申請し、2010 年 11 月 25 日に登記が完了し、「一般社団法人日本リハビリテーション工学協会」が誕生しました。法人設立後の 2011 年度は対外的事業を法人にて実施し、会員サービスは任意団体で実施するという二重の体制をとりました。2012 年度の総会において、任意団体の会員と資産を法人に受け入れ、一応の完全移行を達成しました。

6．一般社団法人としてのリハ工学協会の活動

法人化において、大きな課題は SIG の扱いでした。SIG 活動が活発に実施されていたことから、SIG の中には協会員以外の会員が存在していたり、独自の資産を有していたりするところがあり、これらを法人として一体的に運営することには抵抗も大きく、当分の間は協会内 SIG と外部協力 SIG として存在していただかざるを得ないと判断しました。法人化から 15 年目の 2025 年度からは全てが協会内 SIG となり、完全法人化が達成されたことは喜ばしいことです。

当協会は法改正後比較的早期に法人に移行しましたが、最近ではほとんどの学協会が法人に移行しています。もはや、法人であることは当然のこととして考えられるようになったようです。2010 年当時、当協会は会員数 1,000 人弱であり、会員 1,000 人超えを目標としていました。しかし、リハビリテーション工学をとりまく教育界や社会情勢の変化、あるいは若い人の学協会離れなどから、残念ながら会員数は伸び悩んでいます。このことからも、当初考えていた公益法人化はあきらめ、一般社団法人として運営することを決断された理事会の決定を支持します。もし、定款が当協会の活動を制約しているのであれば、改正し、自由な活動を手にいれるべきでしょう。

一方、社会の少子高齢化や人口減少の進展、そして介護人材不足に対応すべく、介護テクノロジ

ー（2024 年までは厚生労働省は「介護ロボット」、経済産業省は「ロボット介護機器」）の導入・協働化・経営改善等支援を厚生労働省が、社会実装（研究開発）の促進を経済産業省が取り組んでいます。この動きは、当協会が法人化を達成した 2010 年度に、政府が掲げた新成長戦略の中で「高齢者用パーソナルモビリティ、医療・介護ロボット等の研究開発・実用化を促進する」 とされ、「介護・福祉ロボット開発・普及支援プロジェクト検討会」が始まりでした。2018 年度には、一般社団法人日本作業療法士協会が厚生労働省から受託した「介護ロボットのニーズ・シーズ連携協調協議会」事業が開始し、全国 50 か所での介護ニーズと技術シーズのギャップを解消する試みがなされ、2019 年度からは株式会社 NTT データ経営研究所が事務局を担い事業が継続されました。2024 年度からは介護テクノロジーの評価等を行うリビングラボ事業と一体化され、2025 年度からは介護テクノロジー市場への参入を支援する目的で、株式会社三菱総合研究所が受託して「介護系スタートアップ支援事業（CARISO） 」が開始されと、年々事業が重層化しています。障害のある人に対しても厚生労働省社会援護局が公益財団法人テクノエイド協会を通して同様の施策を実施してきておりますが、高齢者介護の分野にも、我々がこれまで培ってきた成果には応用できるものも多々あるのではないでしょうか。

当協会のみなさまも積極的にこの分野に関与していただけたらと思います。既に参画されている会員の方もいらっしゃるでしょうが、ポストコロナは顔を合わせる機会も減りましたし、現在は誰が会員なのかがわかりませんのでご容赦ください。

この、現在誰が仲間なのかがわからないことは、個人情報保護法遵守の点から仕方ないことではありますが、当協会の会員相互のつながりが希薄になった原因の一つではないでしょうか。

参考

1）　一般社団法人及び一般財団法人に関する法律、法令検索、
[https://laws.e-gov.go.jp/law/418AC0000000048] ＊

2）　犯罪による収益の移転防止に関する法律、法令検索、
[https://liws.e-gov.go/law/419A00000000022] ＊

3）　特定非営利活動法人法、法令検索、
[https://laws.e-go.jp/law/410AC1000000007]　＊
4）　公益社団法人及び公益財団法人の認定に関する法律、法令検索、
[https://laws.e-go.jp/law/418AC0000000049]＊
5）　法人設立・完全移行までの経過、日本リハビリテーション工学協会、
[https://www.resja.or.jp/guidance/ikou.html]＊
6）「ロボット技術の介護利用における重点分野」を改訂しました、経済産業省医療・福祉機器産業室、[https://www.meti.go.jp/press/20240628-5/20240628005.html]＊
7）　新成長戦略~「元気な日本」復活のシナリオ~2010 年 6 月 18 日、内閣府、p18、
[https://www.cas.go.jp/tpp/tppinfo/2012/pdf/20100618_kakugikettei.pdf]
8）　福祉用具・介護ロボット実用化支援事業　事業報告書　平成 24 年 3 月、厚生労働省、
[https://techno-aid.or.jp/research. robo2012.05.28.pdf]＊
9）　介護ロボットのニーズ・シーズ連携協調協議会全国設置・運営業務報告書、一般社団法人日本作業療法士協会、平成31年 3 月、
[https://mhlw.go.jp/content/12300000/000501344.pdf]＊
10）MATCHING 2025、厚生労働省、
[https://www.mhlw.go.jp/kaigoseisansei/ns/index.html]＊
11）介護系スタートアップ支援事業(CARISO CARe Innovation Support Office)、厚生労働省、[https://cariso-su.mhlw.go.jp]

＊ いずれも 2026 年 6 月 14 日閲覧

RESJAの想い出

しげなりデザイン研究所
繁成　剛

日本リハビリテーション工学協会（RESJA）設立40周年、誠におめでとうございます。これまで同協会を支えてくださった多くの会員とともに40年にわたって日本のリハビリテーション工学の普及と発展に大きな貢献を果たしてきたことに敬意を表したいと思います。

筆者は1986年の協会設立とともに入会し、神戸で開催された第1回リハ工学カンファレンスから昨年東京で開催された第39回まで毎年欠かさずに参加し、発表した演題数は45本になります。

1979年からリハ工学技士として活動してきた筆者にとって本協会は1年間の研究や実践の発表の場であり、全国のリハ工学関係者との情報交換と交流の場でした。1987年にはSIG（Special Interest Group）の活動が始まり、その一つとして設立したSIG姿勢保持の代表となり現在まで継続しています。

筆者が当協会の世話人として運営に関わったのは1990年から1994年までになります。当時は世話人代表を末田統氏と市川洌氏が務めておられました。1993年から理事という役員名に変わり、2006年まで理事長は末田統氏、市川洌氏、田中理氏が歴任しました。2007年から松尾清美氏が理事長となったときに筆者は監事となり、2012年に協会が一般社団法人となった時まで務めました。

2015年には当時の会長だった相良二朗氏から代表理事を引き継ぐことになり、2017年まで会長の重責を担いました。

会長を務めた2年間に海外のリハ工学協会との交流が活発となり、いくつかの協定を結んだのでその経緯を紹介したいと思います。

まずタイが中心となってアジア各国のリハ工学分野の協会や研究機関が加盟しているiCREATeが発展して、2015年8月にCREATe ASIAとなったときにRESJAの代表としてアグリーメントに調印しました。また同年11月には韓国のソウルで韓国のリハ工学協会のRESKOと台湾の協会であるTREATSの3者間で協力協定（MOA：. Memorandum of Agreement）を結び

ました。RESKOのMoon副会長とTREATSの陳適郷会長と協定書にサインしたときの高揚した会場の雰囲気をよく覚えています。ちょうどRESKOのカンファレンスが開催されており、RESJAの取り組みについて紹介することができました。2016年3月25日から27日まで台湾の台北市でTREATSが開催されましたが、そこにゲストスピーカーとして招待され、開会式の後にRESNAのRay Grott会長と共に基調講演をさせていただきました。27日は花蓮市の慈済大学に会場が移り、ここでは日本でのリハ工学の取り組みとして「姿勢保持と移動の支援技術」について講演させていただきました。大会中は懇親会やエキスカーションツアーなどでVIP待遇をしていただき、陳適郷会長と林光花実行委員長に大変お世話になりました。

その頃、RESNAが中心となって世界各国の支援技術に関連する団体間の協定を結び連合体を設立する動きがあり、RESJAにも加盟の要請がありました。理事会で協議した結果、GAAT（Global Alliance of Assistive Technology Organizations）という名称に決まった連合体にRESNA、AAATE、ARATA、RESKO、TREATS、ISPOなどの協会とともに4月24日に協定書に調印しました。

残念ながらRESJAの国際交流については活発に展開しているとは言い難いのですが、RESKOやCREATe Asiaでは協会の理事が参加してアジアでの関係者との交流を続けています。GAATを通じてRESNAやAAATEなどの世界各国の関連団体との関係が今後発展していくことに期待しています。

2017年8月22日から24日まで神戸国際会議場で開催された第32回リハ工学カンファレンスではiCREATeと同時開催となり、実行委員長の相良二朗氏が両大会の運営を担って奮闘されました。公式ディナーではiCREATeの名誉会長であるタイのシリントン王女が臨席されたことが印象に残っています。

会長在任中に印象に残っているイベントは、同年8月26日から28日まで高知県立福祉交流プラザで開催された第31回リハ工学カンファレンスです。開会式の後にSIG姿勢保持がウレタンフォームを削り出して姿勢を安定させるサポートの制作実習を担当し、30名の参加者が熱心に実習に取り組まれました。

二日目の交流会では協会30周年記念イベントを土佐御苑で開催し、地元の太鼓や踊りが披露され会場一体となった式典となりました。最後に会長として挨拶をさせていただき、長年にわたり協会に貢献していただいた国立障害者リハビリテーションセンターの井上剛伸氏に感謝状と副賞を手渡しました。このカンファレンスの計画から運営まで実行委員長として担当していただいた下元桂子さんと実行委員の皆さまに改めて感謝申し上げます。

第31回リハ工学カンファレンスin高知

SIG姿勢保持のセッション

交流会に集った元協会役員の皆さん

もう一つ特筆したい出来事として、2016年4月14日と16日に震度7の大きな地震が熊本県と大分県で発生し熊本市を中心に大きな被害が出ました。筆者は2011年の東日本大震災では被災地の避難所や仮設住宅に必要となる机や椅子や棚などの家具を強化段ボールで作り被災者に提供する活動を続けていました。熊本地震の直後に地元の知人を通して被害の大きかった御船町の特養

グリーンヒル御船の吉本洋施設長と連絡をとり、避難所に強化段ボールの机と椅子を200台提供しました。また協会では日本財団から助成金を受けることができたので、災害対策委員会のメンバーと避難所3ヶ所で強化段ボールを使って避難生活に必要な家具を被災者と共に制作するワークショップを開催しました。熊本総合医療学院の教員で協会員の笹川友彦氏と熊本学院大学の学生約20名がワークショップにボランティアとして参加してくれたのは大きな力となりました。この時に参加した学生の一人だった近藤友紀子さんが青年海外協力協会（JOCA）所属の義肢装具士として2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災地で支援活動をしていたので、連絡を取り合い、被害の甚大だった能登町の避難所と仮設住宅で3回に渡り支援活動を実施することができました。近藤さんは現在インドネシアでJOCAの一員として活動を続けています。

御船町の避難所で段ボール家具を提供

熊本学院大学の学生によるワークショップ

最後に個人的なことになりますが、筆者は一昨年で古希を迎え、心身ともに老化を感じるこの頃です。大学の教員を退任した昨年の4月に自宅のある東松山市に「しげなりデザイン研究所」を設立し、企業と福祉機器の共同開発を進めたり、関東甲信越の障害児施設や当事者の家族からの要望を受けて姿勢保持具と遊具の製作を続けています。ただ教育や研究の領域から離れたことによって学会発表や論文の投稿などは今年で最後になるでしょう。

今後は会員の皆さまの活躍を陰ながら応援するつもりです。RESJAの今後の発展を祈念して筆を置きたいと思います。

リハビリテーション工学との出会いとその後の関わり

前神奈川県総合リハビリテーションセンター
沖川悦三

一社）日本リハビリテーション工学協会設立 40 周年、おめでとうございます。

永年勤めた神奈川県総合リハビリテーションセンターを 42 年間、無事に勤めて定年退職した。そんな私とリハビリテーション工学（以下、リハ工学）との出会いについてお話しさせていただこうと思う。

私とリハ工学との出会いは 1981 年まで遡る。当時、東海大学工学部で機械工学を学んでいた

私は 4 年生。あまり真面目に学業に取り組んではいなかったと記憶している。どちらかというとサークル活動に熱心で加えて下宿コンパにも熱心であった。このような状況でも卒業研究は必修であり、避けて通ることはできず、それならばと優しいと有名な教授の研究室に入り、あろうことか用意されているテーマではなく「車椅子」の研究開発がしたいと申し入れた・・・と、これも曖昧ながらそう記憶している・・・。ここでなぜ「車椅子」だったのか？そのヒントは学業以上に真面目に取り組んでいたサークル活動にある。私が所属していたサークルは「東海大学ワークキャンプ」という名前のボランティアサークルで、

主な活動は知的障害のある方たちが入所している福祉施設での様々なボランティア活動をしたり、障害者福祉について真面目に考え語り合ったりするというものであった。

このサークルとの出会いは私の将来の人生を決めてしまうほどの出来事であったが、そのいきさつに興味のある方は直接私まで（笑）。

さて、この活動が直接「車椅子」に結びついたわけではなく、当時の僕は障害者福祉と機械工学を結びつけて思い浮かんだのが「車椅子」だけだったのである。

当時の日本では（私の経験だけではあるが）、街中で車椅子を生活に使っている人たちを見かけることはほとんどなかった。加えて私自身「車椅子」使用者との関わりは皆無であり「車椅子」そのものについての知識もなかった。それは教授も同じであり、当然「分からないから自分でやれる場所を探してください。」ということになった。さて困った、「車椅子」のことをよく知らないのにそれが研究できるところなど探せるわけもなく、いろいろ手を尽くしたが東京都社会福祉協議会に電話して「車椅子」の研究ができるところはないかと尋ねたところ、東海大学なら近くに神奈川県総合リハビリテーションセンター（以下、神奈川リハ）という施設があって、そこのリハ工学研究室にいる田中理さんを訪ねなさいと提案いただいた。ワークキャンプの活動でセンター内にある重症心身障害児施設、療育園との関わりはあったが、リハ工学研究室なるものがあることは全く知らなかった。

何はともあれ田中さんに連絡をしたところ、リハ工学研究室で卒業研究をさせていただくことをすんなり受け入れていただいたのである。1981 年 5 月のことであった。卒業研究の詳細は割愛するが、テーマは「スタンドアップ車椅子の研究開発」であった。研究はなんとか無事に進み、試作機が完成し論文も書き上がって発表会も終わった頃、あるトラブルが私を襲うことになるのだが、その頃私は神奈川リハの採用試験を受けることになっていた。トラブルは私の就職を 11 ヶ月遅らせてしまうほどの出来事であったが 1983 年 3 月、何はともあれ無事、就職することができた。

※中略

そして日本リハ工学協会は 1986 年 3 月に発足した。8 月真夏のリハ工学カンファレンスではギラ

ギラしたエンジニアが会を引っ張り、障害当事者、若手エンジニア、リハ医療関係者、福祉関係者、教育関係者、福祉用具関係者など多くのメンバーが朝まで熱く語り合った。すっかり虜になった。それから会の運営にも関わるようになり、会長も務めさせていただいた。

　これからもリハ工学協会の発展と継続のため微力ながら協力していきたい。リハエンジニアやリハ工学関係者が育つ環境や、活躍できる場が少なくなっているとも感じており、かなり厳しい現実もある。

　それでも、明日に向かって走れ！

協会 40 周年にあたり

桂　律也

協会設立 40 周年、おめでとうございます。私が協会員になったのが、1987 年、第2回の湯河原厚生年金会館（熱海市）でのカンファレンスでした。協会が 40 周年なら、私は39周年という事になります（当たり前ですが）。湯河原での、アフターセッション（イブニングセッションだったかもしれません）は、結局オールナイトセッションとなり、障害のある人たちのライフに貢献するための「ものづくり」に情熱を注ぐこの分野の先人たちの熱い議論に圧倒されながらも自分がリハビリテーション医として進むための道を照らしてくれる陽光のような暖かさも感じていました。そこから（正確にはその前後から）、私の「リハ工学体験」が始まり、現在も続いています。

「医療」としてのリハビリテーションだけでは解決のつかない問題に、エンジニアリングが様々な解決策を提示してくれることは、私がリハビリテーション医として患者さんたちの社会参加に寄与するという点に関して、大きな力となりました。

エンジニアリングは、例えば、C4 頸髄損傷を受傷した高校生に、チンコントロールの電動車椅子を作成し、家屋改修、天井走行式リフトの導入、リフト付き自動車の購入支援、そして学校の環境調整を数か月で（それこそあっという間に）済ませて復学まで達成してしまいました。例えば、2歳時に受傷した小児脊髄損傷児童のために、保育園の生活環境に合わせた極小の車椅子を設計・製作し、他の園児とともに「遊ぶ」ことを可能にしてくれました。例えば、重症心身障害児の娘さんが小学校高学年になって、入浴介助が大変になったお母さんのために、洗い場におけるメッシュ地の座位保持機能付きシャワーチェアーを作ってくれました。例えば、養護学校高等部三年生の脳性麻痺の娘さんに、操作可能な電動車椅子のコントローラーと、コミュニケーションエイドを提供し、かつコミュニケーションエイドを電動車椅子に搭載（マウント）して、自らの意思で移動して移動先で人とコミュニケーションをとるという参加の形態を可能にしてくれました。こうして私は、エンジニアリングに育ててもらいながらリハ医人生を歩んできました。

還暦を迎えた時、それまでのリハ医の人生を振り返って、リハ工学にはとても「お世話になった」と改めて思っていたそんな折に、理事にならないかと話をいただきました。任意団体時代に、6年間ほど

理事を務めさせていただいき、第19回カンファレンスの開催と、協会誌担当理事として協会誌編集を担当した経験はあったものの、法人理事となるといろいろと制約も多そうだとためらっていたのですが、結局おだてられて木に登ってしまいました。協会員になって以来、この協会は日本の医療制度の中で資格を持たない（リハ）エンジニアに焦点が当てられ、エンジニアが主導していく会であるべきだと感じ、自身はエンジニアのファンであり、サポーターであり、今風に言えば「押し活」をしているつもりで年を重ねてきました。協会で得た知見をリハビリテーション医療関係者や障害当事者への伝達・広報することによって、リハ工学の発展に寄与することが自分の役目であると考えていました。そんな中での、理事選挙立候補要請だったので、迷いながらも「これまでお世話になった協会だし、（年齢的にも）最後の恩返し」だと思って、引き受けることにしたのです。

理事になって最初の2年は、国際連携を担当するとともに、2019 年には第 34 回リハ工カンファレンスを開催させていただきました。そのカンファレンス期間中の理事会で、協会会長に選任されました。すでに述べた通り、この協会はエンジニアが主体であるべきだとずっと思ってきたので、自分が会長になることは全く考えずにいたのですが、協会員の世代交代の時期とも重なり、野球で言えば「セットアッパー」の役割を果たすべく、会長に就任しました。

会長に就任してからは、不測の事態の連続でした。まず、10 月の理事分掌の引継ぎを兼ねた理事会前日会議が、台風19 号の影響で開催できず、担当理事と前任者のメール等でのやり取りに委ねることになってしまいました。スムースな引継ぎができなかったことが、新任の理事の皆さんに大きな負担を強いることになってしまいました。2020 年に入ると、コロナ禍で、まず理事会の開催ができず、web 会議（オンライン理事会）の体制を構築するのに時間がかかりました。今では当たり前のように行われているzoomを利用した会議も、当時は、法人理事会として成立するものかの確認から、使用料の予算立てなど実現までにはかなり手間取りました。さらに、北九州市で準備を進めていただいていた第 35 回リハ工学カンファレンスについては、中止という決断をせざるをえませんでした。全世界的なイベント自粛の中とは言え、長く続いてきたカンファレンスを中止するという事態には、自分の日ごろの行いが悪いせいではないだろうかと、かなり自虐的な気分になったことを覚えています。北九州のカンファレンスの実行委員会および九州支部の皆様には、翌 2021 年に再び第 35 回カンファレ

ンスの開催にご尽力いただき、かつオンライン開催というこれまた初の試みを成功させてくださり、とても感謝しています。足を向けて眠れません（といっても、北海道から足を南の九州に向けると、必然的に北枕になるので、前々から足を向けてはいませんが）。

台風やコロナ禍といった「禍（わざわい）」に翻弄された 2 年間でしたが、新たな事業展開をすすめた 2 年間でもありました。それまで、委員会として活動していた「国際連携推進」と、「災害対策」について、2020 年に「GAATO（The Global Alliance of Assistive Technology Organizations）」と「JRAT（日本災害リハビリテーション支援協会）」が法人として設立され、法人設立時からの構成団体としてその活動に参加することになりました。参加にあたっては、会費が必要だということもあって、協会や協会員にメリットがあるかどうかの議論がありました。

国際連携については、2000 年 8 月 26 日に、欧州リハビリテーション工学協会（AAATE）、豪州リハビリテーション工学 協会（ARATA） および 北米リハビリテーション工学協会（RESNA）との 4 団体間で締結された、姉妹組織協定（通称「徳島アグリーメント」）以降、当協会が主体的に進めてきたリハ工学／支援技術に関する国際連携が、世界規模の法人化という形で実を結んだものであり、リハ工学/支援技術の各最適な発展を主導していく役割を担い続けるべきだと判断するに至りました。現在、世界各地域の加盟団体も増え、ISPO（国際義肢装具学会）のような関連国際学会とも連携し、さらに WHO とも連携してリハ工学/支援技術の分野を発展させるプログラムを推進しています。国際機関での重要性が向上すれば、国内での認知度も高まり、協会の発展にも少なからず寄与するものと考えています。

災害対策については、東日本大震災後の有志による仮設住宅の環境整備から始まり、復興支援講習会の開催などを行ってきましたが、熊本地震の際の活動中に、JRAT とコンタクトが得られ、現在の JRAT の前身である「大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会」に参加し、各種委員会に委員を派遣していました。法人化の目的は、災害時のリハビリテーションの必要性の認知度を上げ、行政を含めた多方面に理解してもらい、被災された方の活動と参加を促していくことにあると考えていました。資格制度を持たないリハ・エンジニアなので、システムの中で、当協会ができることには限りがあるとも思いましたが、一方で、避難所の環境整備（手すりの設置や段差解消）、トイレの課題、

義肢装具・車椅子の修理調整などなど、リハ工学的な課題も多くあり、JRAT の内部でも十分な理解が得られていない部分も多いと感じていたため、先ずは法人に参加して、災害時のリハ工学・支援技術の必要性を訴えていき、JRAT があまりにも発災直後にこだわるようならば、その時は退会も考えることとしていました。その後、災害時福祉用具調達支援委員会（現　福祉用具委員会）が立ち上がり、「災害時福祉用具調達支援ガイド」が完成しています。また、全都道府県に地域 JRAT が設置され、平時の研修会に福祉用具に関する項目が加えられる機会も増えてきました。

一方で、ここで言う福祉用具は、補装具（義肢装具・車椅子など）と、介護保険の貸与品目にほぼ限定されています。

段ボールベッドや仮設トイレは対象外ですし、布団（毛布）が段ボールベッドからずり落ちるのを防止する滑り止めシート（防動マット）、自衛隊のお風呂に入浴するためのイレクター®などで作る踏み台などなど、リハ工学/支援技術が関わることができる課題がまだまだたくさんあります。しかも、現状は避難所支援にとどまっており、仮設住宅、福祉避難所、何とか自宅にとどまっている被災者（特に障害をお持ちの被災者）への対応は、JRAT の枠組みの中では不十分だと感じています。「災害リハ工学」という分野を着き進めていただきたいと思います。

会長を 2 年間勤めた後は、現在の河合会長に引き継ぎ、SIG 担当理事として SIG の内部化をすすめました。それまでの担当理事の皆様が、筋道を立てていただいていたので、時間はかかりましたが、全 SIG の内部化が達成されました。また、規則担当理事として「個人情報保護方針」、「個人情報取扱規則」、「自主行動基準」などの懸案になっていた規則の策定を行いました。

ここまで読み返してみると、自画自賛のようですが、同時期に支えてくださった多くの理事監事の皆様、理事監事の OB・OG（変な言い方ですが）の皆様のご協力、ご指導、意見交換がなければ、とても達成できませんでした。改めて、この協会のすごさを感じています。

最後に、数えで喜寿になりました。リハ工学のますますの発展を祈りながら、老害と呼ばれぬよう意見は控えめにしながら、勉強させていただきたいと思います。リハ医をはじめとして、リハ専門職にリハ工学/支援技術が十分に伝わっていない現状があります。これからは、医療職に伝えていく活動を、知力と体力の続く限り細々とやっていこうと思っています。

協会のあゆみ① リハ工学カンファレンス

リハ工学カンファレンス開催地一覧 1989～1995

回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
開催年	1986	1987	1988	1989	1990
月日	8/19(火)-21(木)	8/18(火)-20(木)	8/3(水)-6(土)	8/3(日)-5(火)	8/21(火)-24(金)
開催都市	兵庫県神戸市	神奈川県湯河原町/静岡県熱海市	富山県富山市	福岡県北九州市	東京都目黒区
会場	舞子ビラ	湯河原厚生年金会館	ボルファートとやま	九州厚生年金会館	こまばエミナース
テーマ					
大会長	運営委員会代表:末田統・市川洌				
実行委員長		田中理	山本敏泰	御手洗謙二	市川洌
演題数	口頭:65	口頭:59	演題:98	口頭:81	口頭:112,ビデオ:14
登録参加者	197 名	約 130 名	約 300 名	約 312 名	467 名

回数	第 6 回	第 7 回	第 8 回	第 9 回	第 10 回
開催年	1991	1992	1993	1994	1995
月日	8/27(水)-29(金)	5/28(木)-30(土)	8/3(火)-6(金)	8/24(水)-26(金)	8/24(木)-26(土)
開催都市	北海道札幌市	兵庫県神戸市	埼玉県所沢市	宮城県仙台市	大阪府大阪市
会場	北海道大学学術交流会館	神戸国際会議場	国立身体障害者リハビリテーションセンター	仙台市青年文化センター	アピオ大阪(大阪市立労働会館)
テーマ	国際障害者年から 10 年そして未来へ・・・・			暮らしやすさと自立を求めて	
大会長				半田康延	大浦敏明
実行委員長	伊福部達	末田統	山内繁	原鉄哉	関宏之
演題数		口頭:112	口頭:157, 展示発表:22	口頭:157, 展示発表:21	口頭:149, 展示:24, ビデオ:10
登録参加者		423 名			
備考		リハ医学会と同日開催			

リハ工学カンファレンス開催地一覧 1996～2005

回数	第 11 回	第 12 回	第 13 回	第 14 回	第 15 回
開催年	1996	1997	1998	1999	2000
月日	7/24(水)-26(金)	8/27(水)-29(金)	8/20(木)-22(土)	8/26(木)-28(土)	8/25(金)-27(日)
開催都市	神奈川県伊勢原市	長崎県佐世保市	岐阜県大垣市	石川県金沢市	徳島県徳島市
会場	FORUM246	西海パールシーリゾート(現 九十九島パールシーリゾート)	ソフトピアジャパン	金沢市文化ホール	徳島県郷土文化会館
テーマ					
大会長	田中理	後藤裕	梶原拓	谷本正憲	末田統
実行委員長	沖川悦三	光野有次	上村数洋	荒井利春	井手将文
演題数	口頭:102, 展示:28, ビデオ:16		口頭:108, 展示・ポスター:20	口頭:141, ポスター28	口頭:139, ポスター:35
登録参加者			521 名		354 名

回数	第 16 回	第 17 回	第 18 回	第 19 回	第 20 回
開催年	2001	2002	2003	2004	2005
月日	8/27(月)-29(水)	8/29(木)-31(土)	8/28(木)-30(土)	8/25(水)-27(金)	9/1(木-3(土)
開催都市	岡山県岡山市	神奈川県横浜市	栃木県宇都宮市	北海道札幌市	佐賀県佐賀市
会場	岡山コンベンションセンター(ママカリフォーラム)	ひまわりの郷(港南区民文化センター)、ウィリング横浜	栃木県総合文化センター	札幌コンベンションセンター	佐賀市文化会館
テーマ		リハ工学と支援技術の活性化をめざして	介護・福祉用具と環境整備 -制度とその活用-	ユーザーニーズとリハ工学・支援技術	佐賀で SAGA そう!!人(ひと)・道具(もの)・技術(わざ) ～みんなが輝く、みんなの連携～
大会長	奥英久		田中繁		渡邊照男
実行委員長	椋代弘	田中理	山本澄子	桂律也	松尾清美
演題数	口頭:142, ポスター:27	口頭:139, インタラクティブ:43	口頭:136, 展示発表:28	口頭:131, 英語:9, 展示発表:21	口頭:146, 英語:6, 展示発表:26, SHOW&TELL:5
登録参加者	488 名	642 名	551 名	355 名	479 名

リハ工学カンファレンス開催地一覧 2006～2015

回数	第 21 回	第 22 回	第 23 回	第 24 回	第 25 回
開催年	2006	2007	2008	2009	2010
月日	8/24(木)-26(土)	8/23(木)-25(金)	8/27(水)-29(金)	8/26(水)-28(金)	8/26(木)-28(土)
開催都市	兵庫県神戸市	愛知県名古屋市	新潟県新潟市	埼玉県所沢市	宮城県仙台市
会場	神戸学院大学	名古屋国際会議場	朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター	国立障害者リハビリテーションセンター	仙台市情報･産業プラザ(現 仙台市中小企業活性化センター)
テーマ	1986 年夏、神戸から始まった･･･神戸への回帰☆神戸からの出発	いりゃあせ NAGOYA！人と出会う。技術と出会う。～アツく語ろう！みんなの生活(くらし)～	QOL for ALL (全ての人の生活の質の向上)	飛翔 - いま考える、当事者発のリハビリテーション工学	伊達で,まざらいん ～みんなにやさしい ぎじゅつ～
大会長	奈良勲		高橋栄明	諏訪基	梨原宏
実行委員長	黒田大治郎	渡辺崇史	大鍋寿一	井上剛伸	巴雅人
演題数	口頭:148, インタラクティブ:27	口頭:101, インタラクティブ:15	口頭:135, インタラクティブ:19	口頭:107, インタラクティブ:15	口頭:107, インタラクティブ:21
登録参加者	435 名	387 名	351 名	383 名	359 名

回数	第 26 回	第 27 回	第 28 回	第 29 回	第 30 回
開催年	2011	2012	2013	2014	2015
月日	8/24(水)-26(金)	8/23(木)-25(土)	8/22(木)-24(土)	8/25(月)-27(水)	11/13(金)-15(日)
開催都市	大阪府大阪市	福岡県福岡市	岩手県盛岡市	広島県呉市	沖縄県那覇市
会場	大阪市中央公会堂	アクロス福岡	いわて県民情報交流センター	広島国際大学呉キャンパス	沖縄県総合福祉センター
テーマ	大阪から世界へ! くらし ものづくり QOL	リハ工で縁活! ～技術と知識がつながる機会～	みちのくで今、絆をカタチに	ひろしまからの発信	技のちゃんぷる～御万人(うまんちゅ)を支えるテクノロジー
大会長	上好昭孝	芝啓一郎	高橋明	秋山實利	瀧下修一
実行委員長	古井透	寺師良輝	米本清	南山求	金城知子
演題数	口頭:119, インタラクティブ:23	口頭:101, インタラクティブ:24	口頭:104, インタラクティブ:21	口頭:73, インタラクティブ:23	口頭:104, インタラクティブ:15
登録参加者	363 名	285 名	296 名	228 名	264 名
備考					

リハ工学カンファレンス開催地一覧 2016～2026

回数	第 31 回	第 32 回	第 33 回	第 34 回	第 35 回
開催年	2016	2017	2018	2019	2021
月日	8/26(金)-28(日)	8/22(火)-24(木)	8/29(水)-31(金)	8/21(水)-23(金)	9/25(土)-26(日)
開催都市	高知県高知市	兵庫県神戸市	神奈川県厚木市	北海道札幌市	オンライン開催
会場	高知県立ふくし交流プラザ	神戸国際会議場	厚木文化会館	北海道科学大学	実施会場:西日本工業大学(福岡県北九州市)
テーマ	あたりまえの生活を保障する ～可能性を拡げるテクノロジー～	Powerful Asia -支える技術でつながる みんなと社会-	神奈川の中心で、支援技術をかたる～そして、リハビリテーション工学の未来へ～	リハ工学と看護・介護	リハ工学で支える新しいライフスタイル
大会長	白石研二	相良二朗	沖川悦三	桂律也	繁成剛
実行委員長	下元佳子	中村俊哉	村田知之	早川康之	中村詩子
演題数	口頭:83, インタラクティブ 18	口頭:84, インタラクティブ:26	口頭:84, インタラクティブ:36	口頭:83, インタラクティブ:16	口頭:73
登録参加者	262 名	306 名	327 名	213 名	180 名

回数	第 36 回	第 37 回	第 38 回	第 39 回	第 40 回
開催年	2022	2023	2024	2025	2026
月日	8/20(土)-21(日)	8/24(木)-26(土)	8/23(金)-25(日)	8/8(金)-10(日)	8/21(金)-23(日)
開催都市	オンライン開催	東京都目黒区	愛知県東海市	東京都北区	兵庫県神戸市
会場	運営会場:広島国際大学(広島県東広島市)	東京大学 先端科学技術研究センター	日本福祉大学 東海キャンパス	東洋大学赤羽台キャンパス	神戸学院大学 ポートアイランド第 1 キャンパス
テーマ	リハ工学が変える！住み続けられるまちづくり	リハ工の先端で、インクルーシブ社会をさけぶ	出会いが生むミライ-人とテクノロジーが紡ぐみんなのくらし-	アクセシブルな未来のデザイン	リハ工学のこれまでとこれから-支える技術、つなぐ想い、紡ぐくらし-
大会長	鈴木太	熊谷晋一郎	渡辺崇史		
実行委員長	谷口公友	並木重宏	長束晶夫	高橋良至	金井謙介
演題数	口頭:39, オープンカンファレンス:8	口頭(国際セッション含む):55, インタラクティブ:5	口頭(OS, ポストカンファ含む):83, インタラクティブ:7	口頭(OS 含む):64, インタラクティブ:15	口頭(OS 含む):94, インタラクティブ:21
登録参加者	103 名	193 名	302 名	222 名	350名
備考					演題数は予定数

※ 2020 年度は COVID-19 感染対策のため開催中止
※ OS:オーガナイズドセッションン
※ 第 41 回リハ工学カンファレンス(2027 年)は、8/27(金)-29(日) 大分県大分市(ホルトホール大分)を予定

協会のあゆみ②　協会誌特集一覧

協会誌「リハビリテーション・エンジニアリング

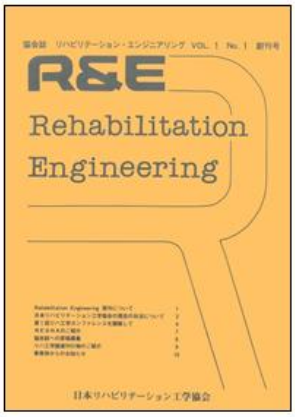
編集委員、執筆者、投稿者、査読者、印刷事業者のみなさまのこれまでの御尽力に感謝申し上げます。

発行年月	巻／号(通巻)	特集内容	特集担当 編集委員
1986 年 10 月	Vol.1 / No.1(通巻 1 号)	(特集なし)	
1987 年 3 月	Vol.1 / No.2(通巻 2 号)	(特集なし)	
1987 年 9 月	Vol.2 / No.1(通巻 3 号)	(特集なし)	
1988 年 3 月	Vol.2 / No.2(通巻 4 号)	特集「環境制御装置」	
1988 年 9 月	Vol.3 / No.1(通巻 5 号)	特集「シンボルコミュニケーション」	
1989 年 6 月	Vol.3 / No.2(通巻 6 号)	特集「重度障害者のための車いす」	
1989 年 12 月	Vol.4 / No.1(通巻 7 号)	特集「第 1 回福祉機器コンテスト」	
1990 年 5 月	Vol.4 / No.2(通巻 8 号)	特集「自動車」	
1990 年 12 月	Vol.5 / No.1(通巻 9 号)	特集「第 2 回福祉機器コンテスト」	
1991 年 3 月	Vol.5 / No.2(通巻 10 号)	特集「感覚障害者用機器」	
	Vol.6 / No.1(通巻 11 号)	特集「サニタリ環境」	
1991 年 10 月	Vol.6 / No.2(通巻 12 号)	特集「遊び／第 3 回福祉機器コンテスト」	
	Vol.6 / No.3(通巻 13 号)	特集「排泄」	
1992 年 7 月	Vol.7 / No.1(通巻 14 号)	特集「身体障害者の就業と技術支援」	
1992 年 12 月	Vol.7 / No.2(通巻 15 号)	特集「身体障害者のスポーツとリハビリテーション工学」	
1993 年 2 月	Vol.8 / No.1(通巻 16 号)	特集「障害者の利用する機器具や情報の流通」	
1993 年 6 月	Vol.8 / No.2(通巻 17 号)	特集「コミュニケーション」	
1993 年 10 月	Vol.8 / No.3(通巻 18 号)	特集「旅行」	
1994 年 2 月	Vol.9 / No.1(通巻 19 号)	特集「通勤・通学・ショツピンク」	
1994 年 6 月	Vol.9 / No.2(通巻 20 号)	特集「生活機器と住環境」	
1994 年 10 月	Vol.9 / No.3(通巻 21 号)	特集「福祉機器コンテスト」	田中　理
1995 年 2 月	Vol.10 / No.1(通巻 22 号)	特集「地域生活」	金子　寿
1995 年 6 月	Vol.10 / No.2(通巻 23 号)	特集「障害者の災害対策」	金子　寿
1995 年 10 月	Vol.10 / No.3(通巻 24 号)	特集「福祉機器コンテスト」	井手　将文
1996 年 2 月	Vol.11 / No.1(通巻 25 号)	ミニ特集「在宅介護支援センター」	市川　洌
1996 年 6 月	Vol.11 / No.2(通巻 26 号)	特集「輸入電動車椅子」	井上　剛伸
1996 年 10 月	Vol.11 / No.3(通巻 27 号)	特集「パラリンピック」	松野　史幸
1997 年 2 月	Vol.12 / No.1(通巻 28 号)	特集「グラフィック・シンボル利用によるコミュニケーション支援」	関　育子
1997 年 6 月	Vol.12 / No.2(通巻 29 号)	特集「福祉機器供給システム1」	橋詰　努
1997 年 10 月	Vol.12 / No.3(通巻 30 号)	特集「福祉機器供給システム2」	橋詰　努
1998 年 2 月	Vol.13 / No.1(通巻 31 号)	特集「高齢者・障害者の交通とまちづくり」	橋詰　努
1998 年 6 月	Vol.13 / No.2(通巻 32 号)	特集「高齢者のシーティングシステム」	廣瀬　秀行
1998 年 10 月	Vol.13 / No.3(通巻 33 号)	特集「人工呼吸器を使用している人々とリハ工学」	大津　慶子
1999 年 2 月	Vol.14 / No.1(通巻 34 号)	特集「福祉用具の価値」	井上　剛伸
1999 年 6 月	Vol.14 / No.2(通巻 35 号)	特集「情報と福祉機器」	手嶋　教之

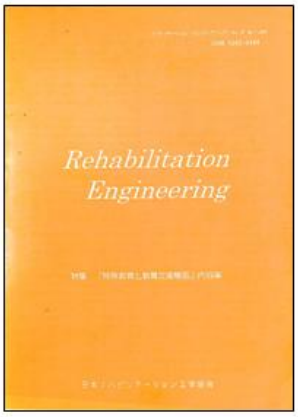
1999 年 10 月	Vol.14 / No.3(通巻 36 号)	特集「視覚障害」	青野　雅人
2000 年 2 月	Vol.15 / No.1(通巻 37 号)	特集「特殊教育と教育支援機器」	松本　廣
2000 年 5 月	Vol.15 / No.2(通巻 38 号)	特集「入浴環境」	江原　喜人
2000 年 8 月	Vol.15 / No.3(通巻 39 号)	特集「介護保険と変貌する福祉用具供給システム」	古瀬　喜久
2000 年 10 月	Vol.15 / No.4(通巻 40 号)	特集「聴覚障害」	関　喜一
2001 年 2 月	Vol.16 / No.1(通巻 41 号)	特集「リハビリテーション工学とデザイン」	酒寄　映子
2001 年 5 月	Vol.16 / No.2(通巻 42 号)	特集「21 世紀のリハビリテーション工学と SIG 活動」	桂　律也
2001 年 8 月	Vol.16 / No.3(通巻 43 号)	特集「福祉機器の使い方とメンテナンス」	秋元　明子
2001 年 10 月	Vol.16 / No.4(通巻 44 号)	特集「子供の使う福祉用具」	加藤　敦子
2002 年 2 月	Vol.17 / No.1(通巻 45 号)	特集「エンジニアリングとリハエ学」	松田　靖史
2002 年 5 月	Vol.17 / No.2(通巻 46 号)	特集「福祉機器不適合による二次障害」	江原　喜人
2002 年 8 月	Vol.17 / No.3(通巻 47 号)	特集「リハビリテーション工学と人間工学」	西岡　基夫
2002 年 10 月	Vol.17 / No.4(通巻 48 号)	特集「生活を支える動物・ロボット」	角倉　寛子
2003 年 2 月	Vol.18 / No.1(通巻 49 号)	特集「リハ体育・レクリエーション・スポーツなど」	大房　朋文
2003 年 5 月	Vol.18 / No.2(通巻 50 号)	特集「車いすシートクッション」	桂　律也
2003 年 8 月	Vol.18 / No.3(通巻 51 号)	特集「吊り具」	佐藤　史子
2003 年 10 月	Vol.18 / No.4(通巻 52 号)	特集「介護者への支援技術・福祉機器コンテスト報告」	長谷川玄哉
2004 年 2 月	Vol.19 / No.1(通巻 53 号)	特集「福祉用具に関わる人の視野を広げるためにできること」	吉田　泰三
2004 年 5 月	Vol.19 / No.2(通巻 54 号)	「肢体不自由児・者のIT(情報通信技術)利用に必要な支援～現状と課題」	北野　義明
2004 年 8 月	Vol.19 / No.3(通巻 55 号)	特集「雪国に暮らす」	鷹觜　悦子
2004 年 10 月	Vol.19 / No.4(通巻 56 号)	特集「ユニバーサルデザインへのアプローチ」	森　由香
2005 年 2 月	Vol.20 / No.1(通巻 57 号)	特集「知的障害のある人々への生活支援」	植田　瑞昌
2005 年 5 月	Vol.20 / No.2(通巻 58 号)	特集「リハビリテーション工学をめぐるチームアプローチ」	松本　政悦
2005 年 8 月	Vol.20 / No.3(通巻 59 号)	特集「特別支援教育とリハ工学」	糟谷　佐紀
2005 年 11 月	Vol.20 / No.4(通巻 60 号)	特集「機械の可能性を探る」	岡野　善記
2006 年 2 月	Vol.21 / No.1(通巻 61 号)	特集「震災時の災害弱者支援」	岡田　裕生
2006 年 5 月	Vol.21 / No.2(通巻 62 号)	特集「電動車いすの現状と可能性」	北野　義明
2006 年 8 月	Vol.21 / No.3(通巻 63 号)	特集「視覚障害者への外出支援」	白鳥　智子
2006 年 11 月	Vol.21 / No.4(通巻 64 号)	特集「ユーザーのニーズを探る」	山田　浩
2007 年 2 月	Vol.22 / No.1(通巻 65 号)	特集「アクティブ・バランス・シーティング」	塚田　敦史
2007 年 5 月	Vol.22 / No.2(通巻 66 号)	特集「ニーズやシーズが商品に至るまで」	小林　博光
2007 年 8 月	Vol.22 / No.3(通巻 67 号)	特集「標準規格」	鈴木　聖貴
2007 年 11 月	Vol.22 / No.4(通巻 68 号)	特集「福祉用具の安全性を高める取り組み」	田治　秀彦
2008 年 2 月	Vol.23 / No.1(通巻 69 号)	特集「地域における福祉用具の提供と適合支援」	鬼頭　義徳
2008 年 5 月	Vol.23 / No.2(通巻 70 号)	特集「社会とリハビリテーション工学」	二瓶　美里
2008 年 8 月	Vol.23 / No.3(通巻 71 号)	特集「リハ工学情報を共有するために」	村山　真理
2008 年 11 月	Vol.23 / No.4(通巻 72 号)	特集「意欲を引き出すデザイン」	高原　光恵
2009 年 2 月	Vol.24 / No.1(通巻 73 号)	特集「生活(くらし)を豊かにする)」	船谷　俊彰
2009 年 5 月	Vol.24 / No.2(通巻 74 号)	特集「交通バリアフリー　－当事者の移動－」	岩崎　満男
2009 年 8 月	Vol.24 / No.3(通巻 75 号)	特集「靴　－合った靴を選ぶためには－」	櫻井　愛子
2009 年 11 月	Vol.24 / No.4(通巻 76 号)	特集「外へ出よう－重度障害者の社会参加－」	宮野　秀樹
2010 年 2 月	Vol.25 / No.1(通巻 77 号)	特集「機器の流通」	前野　豊

2010 年 5 月	Vol.25 / No.2(通巻 78 号)	特集「特別支援教育」	松田靖史・ 高原 光恵
2010 年 8 月	Vol.25 / No.3(通巻 79 号)	特集「機器のメンテナンス」	仲島 千景
2010 年 11 月	Vol.25 / No.4(通巻 80 号)	特集「リハ工学(福祉用具等)に関わる職種の人材育成と現場実践力」	水澤 二郎
2011 年 2 月	Vol.26 / No.1(通巻 81 号)	特集「認知機能の低下により福祉用具をうまく使えない方への支援技術」	出口 弦舞
2011 年 5 月	Vol.26 / No.2(通巻 82 号)	特集「こどもの福祉用具－当事者視点に近づく－」	中村 詩子
2011 年 8 月	Vol.26 / No.3(通巻 83 号)	特集「検証－介護保険制度における福祉用具と住宅改修の 10 年 －現状と今後の課題－」	慶徳 民夫
2011 年 11 月	Vol.26 / No.4(通巻 84 号)	特集「安心で安全な移乗」	成瀬 進
2012 年 2 月	Vol.27 / No.1(通巻 85 号)	特集「これからの自立支援機器に求めること －頸損解体新書実態調査から見えてきたもの－」	鴨治 慎吾
2012 年 5 月	Vol.27 / No.2(通巻 86 号)	特集「道具でひろがる世界」	太田 博巳
2012 年 8 月	Vol.27 / No.3(通巻 87 号)	特集「世界で勝つ－ロンドンパラリンピックに寄せて－」	前野 豊
2012 年 11 月	Vol.27 / No.4(通巻 88 号)	特集「趣味・余暇の楽しみをひろげる機器」	笹川 友彦
2013 年 2 月	Vol.28 / No.1(通巻 89 号)	特集「ICFとアシスティブプロダクツ」	岡田 裕生
2013 年 5 月	Vol.28 / No.2(通巻 90 号)	特集「排泄の方法と支援技術－外出の機会を広げるために－」	村田 知之
2013 年 8 月	Vol.28 / No.3(通巻 91 号)	特集「排泄の方法と支援技術－外出の機会を広げるために －心からリハする－ファッショナブルに生きたい－」	圓井美貴子
2013 年 11 月	Vol.28 / No.4(通巻 92 号)	特集「難病とリハ工学」	西村 顕
2014 年 2 月	Vol.29 / No.1(通巻 93 号)	特集「私の手になる道具たち」	鈴木 太
2014 年 5 月	Vol.29 / No.2(通巻 94 号)	特集「安全に安心して使い続けるために(車椅子編)」	片石 任
2014 年 8 月	Vol.29 / No.3(通巻 95 号)	特集「人工ボディ」	中村 宣郎
2014 年 11 月	Vol.29 / No.4(通巻 96 号)	特集「障害者差別―知る・向き合う・取り払う―」	油田あゆみ
2015 年 2 月	Vol.30 / No.1(通巻 97 号)	「30 巻記念号　これ(今日)までの 30 年」	土田 浩敬
2015 年 5 月	Vol.30 / No.2(通巻 98 号)	「30 巻)記念号　これ(明日)からの 30 年」	佐々木 誠
2015 年 8 月	Vol.30 / No.3(通巻 99 号)	「転ばぬ先のちえ」	香田 潤
2015 年 11 月	Vol.29 / No.4(通巻 100 号)	「未来の『パラリンピック』―Rio to Tokyo／2016～2020―」	岩下 航大
2016 年 2 月	Vol.31 / No.1(通巻 101 号)	特集「私たちのいきる道－障がいを笑涯に－」	土田 浩敬
2016 年 5 月	Vol.31 / No.2(通巻 102 号)	特集「Festina Lente! ゆっくり急げ　急性期にしかできない支援」	佐藤 遼太郎
2016 年 8 月	Vol.31 / No.3(通巻 103 号)	特集「話して　すっきりしよう！―相談の中から発見される人間関係　技術　ぴったりの解決策―」	木澤 健司
2016 年 11 月	Vol.31 / No.4(通巻 104 号)	特集「重度障害者のコミュニケーション機器　－変遷する技術と支援－」	北岡 剛
2017 年 2 月	Vol.32 / No.1(通巻 105 号)	特集「センサとリハ工学」	谷口 公友
2017 年 5 月	Vol.32 / No.2(通巻 106 号)	特集「災害時の環境整備　日常生活を取り戻すための技術」	野口 祐子
2017 年 8 月	Vol.32 / No.3(通巻 107 号)	特集「しあわせを呼ぶ支援機器」	東畠 弘子
2017 年 11 月	Vol.32 / No.4(通巻 108 号)	特集「おいしいごはんでおおきくな～れ♪」	鈴木 明子
2018 年 2 月	Vol.33 / No.1(通巻 109 号)	特集「いのちをそだてる　―障害のある親の子育て―」	櫛田 美知子
2018 年 5 月	Vol.33 / No.2(通巻 110 号)	特集「AI とロボットは支援者になれるのか」	菅野 智穂
2018 年 8 月	Vol.33 / No.3(通巻 111 号)	特集「遊び　最近の動向」	谷口 公友
2018 年 11 月	Vol.33 / No.4(通巻 112 号)	特集「人工内耳」	中村 和己
2019 年 2 月	Vol.34 / No.1(通巻 113 号)	特集「リハビリテーション工学の卒前教育の現状と課題」	徳田 良英
2019 年 5 月	Vol.34 / No.2(通巻 114 号)	特集「認知症のある人を支援する」	橋本 文子
2019 年 8 月	Vol.34 / No.3(通巻 115 号)	特集「障害者スポーツの未来と挑戦し続けるアスリートを取り巻く環境」	島本 卓

2019 年 11 月	Vol.34 / No.4(通巻 116 号)	特集「サイエンスを民主化せよ－インクルーシブデザインラボをめざして－」	熊谷 晋一郎
2020 年 2 月	Vol.35 / No.1(通巻 117 号)	特集「自分らしく暮らしたい」	白石 充
2020 年 5 月	Vol.35 / No.2(通巻 118 号)	特集「ものづくり新時代 －3D プリンタの現在と未来－」	松田 健太
2020 年 8 月	Vol.35 / No.3(通巻 119 号)	特集「新型コロナウイルスへの対応　第 1 回」	編集委員会
2020 年 11 月	Vol.35 / No.4(通巻 120 号)	特集「新しいリハビリテーション領域と機器」	髙野 吉朗
2021 年 2 月	Vol.36 / No.1(通巻 121 号)	特集「障害と働き方」	並木 重宏
2021 年 5 月	Vol.36 / No.2(通巻 122 号)	特集「技を伝える～障害者の生活を支えるための暗黙知とその伝承～」	硯川 潤
2021 年 8 月	Vol.36 / No.3(通巻 123 号)	特集「ケア現場の組織づくりのための労働安全衛生 ～ノーリフティングケアの取り組み～」	福島 寿道
2021 年 11 月	Vol.36 / No.4(通巻 124 号)	特集「気持ちよい排泄を目指して ～用具がつなぐコンチネンスケア～」	小島 みさお
2022 年 2 月	Vol.37 / No.1(通巻 125 号)	特集「10 年後に向けて、脊髄損傷の再生治療とリハビリテーションの取り組み」	安藤 信哉
2022 年 5 月	Vol.37 / No.2(通巻 126 号)	特集「旅に出る」	五十嵐有紀子
2022 年 8 月	Vol.37 / No.3(通巻 127 号)	特集「教育と VR テクノロジーの発展について」	有久 勝彦
2022 年 11 月	Vol.37 / No.4(通巻 128 号)	特集「生活を支えるスマホ・タブレット型端末によるアプリ・IoT」	廣田 祐樹
2023 年 2 月	Vol.38 / No.1(通巻 129 号)	特集「高齢者の移動を支援する用具について」	鹿島 美恵子
2023 年 5 月	Vol.38 / No.2(通巻 130 号)	特集「食べることを支援する」	吉見 佳那子
2023 年 8 月	Vol.38 / No.3(通巻 131 号)	特集「可能性を広げる電動車椅子 ～多職種で支える車椅子利用者の暮らし～」	廣島 拓也
2023 年 11 月	Vol.38 / No.4(通巻 132 号)	特集「入浴ケアの可能性」	大泉 えり
2024 年 2 月	Vol.39 / No.1(通巻 133 号)	特集「障がい者がスポーツとレクリエーションから得られる well-being」	高士 真奈
2024 年 5 月	Vol.39 / No.2(通巻 134 号)	特集「リハビリテーション領域における ウェアラブル・ノンウェアラブルデバイスの活用」	山本 達也
2024 年 8 月	Vol.39 / No.3(通巻 135 号)	特集「災害対応のアップデート」	村岡 健史
2024 年 11 月	Vol.39 / No.4(通巻 136 号)	特集「福祉用具にも求められる魅力的なデザイン」	佐藤 昭則
2025 年 2 月	Vol.40 / No.1(通巻 137 号)	特集「挑戦への第一歩～パラスポーツで叶える自分の可能性～」	冨田 藍
2025 年 5 月	Vol40 / No.2(通巻 138 号)	特集「介護ベッド(特殊寝台)の活用で生活をより豊かに」	宮野 貴幸
2025 年 8 月	Vol.40 / No.3(通巻 139 号)	特集「担い手の育成に向けたリハビリテーション工学教育」	浅井 直樹
2025 年 11 月	Vol.40 / No.4(通巻 140 号)	特集「新サービス・新製品の開発に携わるいろいろな人達の思いと夢」	泉谷 諭司
2026 年 2 月	Vol.41 / No.1(通巻 141 号)	特集「AI とリハビリテーション工学」	柏原 康徳
2026 年 5 月	Vol.41 / No.2(通巻 142 号)	特集「臨床知と工学知の可能性」	中原 啓太
･･･Vol.41 / No.3(通巻 143 号)以降　電子版にて継続刊行中･･･			



創刊号
Vol1. No1. 1986



年4回刊行となる
Vol15. No1 2000

A4版　表紙コンテスト開始
Vol16. No1 2001

通巻100号
Vol30. No4 2015

協会のあゆみ③　福祉機器コンテスト受賞作品・後援協賛団体一覧

年	コンテスト名	賞 名	作品名	受賞者
1989	第1回福祉機器コンテスト	グランプリ	移乗機 こまわりさん	田中 理・他６名
		優秀賞	ドリーム・ブロックなど障害児教育用パソコン・システム	森田 隆尚・他５名
		優秀賞	木材を主素材とした屋内用車椅子	梨原 宏・他３名
		ハンドクラフト賞	自動書見台	佐藤 達廣
		ユーザー賞	（トーキング・エイドにより自分の意思伝達・感情表現が可能に）	小林 愛子
1990	第2回福祉機器コンテスト	グランプリ	オニオン OS-Ⅲ（3次元型電動車椅子）	西平 哲也・他４名
		優秀賞	NEW SRC ウォーカー（スーパー木馬）	繁成 剛・他２名
		準優秀賞	介助用電動車椅子	米田 郁夫・他５名
		ハンドクラフト賞	ゲートボール・スパーク・ディバイス	石黒 望
		ハンドクラフト賞	スライド式電動車椅子用テーブル	古川 洋高
		ユーザー賞	（パソパルによって一人で文章や絵が書けるようになり、コミュニケーションが豊かに）	佐々木 好江
		ユーザー賞	（電動編み機やドリームブロックを操作するようになり、社会性も獲得）	北河 和広
1991	第3回福祉機器コンテスト	特別賞	FESMATE 1000（機能的電気刺激装置）	石川 清一・他８名
		ハンドクラフト賞	片手かぎ針編み機	宮口英樹、恩地葉子
		優秀賞	新聞オートターナー	椛島正年、松永敏男
		奨励賞	坂転がしボーリング	久高 友司
		佳作	パソコン PC98 用文字入力支援ソフトウェア・ライブラリー	青木 久、正木憲司
		佳作	入浴介助器	那須 隼人
		ユーザー賞	（13 種類の機器を導入し、家族の介助を最低限に）	内山 幸久
		ユーザー賞	（電動リフターの導入により、障害者に対する工夫が生まれ、障害の軽減も見られた）	渡辺 隼男
1992	福祉機器コンテスト'92	グランプリ賞	インテリジェント大腿義足膝継手	鈴木 義一・他 16 名
		優秀賞	ニュークラーネ	井浦 忠・他２名
		優秀賞	障害児（者）のための電話練習・会話訓練システム	大下真二郎・他２名
		ハンドクラフト賞	ペンケースマウス	佐藤 正夫
		ハンドクラフト賞	おえかきボード	寺沢 年代・他３名
		奨励賞	靴下履き器	渡辺かおり・他５名
		ユーザー賞	（ペンケースマウスなどを活用し学習活動に参加）	福田 裕介
1993	福祉機器コンテスト'93	グランプリ賞	（該当作品なし）	
		優秀賞	身障者用の食器セット「夢食器 虹彩（レインボー）」	本多 賢光
		優秀賞	アクティブ型車いす（足制御型・手制御型）	西村 重男・他２名
		ハンドクラフト賞	リリアン様メリヤス・ゴム編み機	猪狩 もとみ・他１名
		努力賞	リップオープナー（陰唇開大器）	松尾 清美
		努力賞	背面開放型端座位保持具「座ろうくん」	園尾 義之・他２名
		便利賞	簡易点字刻印機「ドットメーカー」	松本 日世・他２名
		敢闘賞	らくらく食器 No.1、らくらく食器 No.3	新田 義治
		生活賞	寝たきり予防椅子「お元気さん」	大竹登志子・他５名
		技能賞	簡易シーティングシステム「ノア」の箱舟	岸本 眞

年	コンテスト名	部 門	賞 名	作品名	受賞者
1994	福祉機器コンテスト'94		グランプリ賞	アームレスト伸展式六点接地型車いす	橋元 隆・他３名
		企業の部	優秀賞	リンクバネ機構による手動座面昇降機能付き車いす	株式会社ユニカム・他
		個人の部	優秀賞	電動イーゼル	松本 浩嗣
		企業の部	社会貢献賞	ラクラクキット SK-M7（視覚障害者用ミニコンポ操作ガイド）	オンキヨー株式会社開発センター
		個人の部	努力賞	WING-52	松本 廣
		個人の部	きらりデザイン賞	女性用膀胱瘻パンティ	牧野 博次
		個人の部	きらり機能賞	N 式（長崎労災病院式）移動バー	三原 和行
		個人の部	生活工夫賞 （特別賞）	（機器賞に3点、ユーザー賞に4点を応募）	久保 史樹
		個人の部	ユーザー賞	（シンプルな構造の入浴介助具を考案）	平松 サナ枝
		個人の部	ユーザー賞	（コンピュータ関連機器（KB マウスなど）を活用し、パソコン通信や読書を楽しむ）	轟木 敏秀
1995	福祉機器コンテスト'95	機器部門	優秀賞（企業）	ピクニー	川村技研（株）・他
		機器部門	優秀賞（企業）	家庭用入浴介護リフト「マイティエイド80」	（株）ミクニ
		機器部門	優秀賞（企業）	オーエックスMX－01	（株）オーエックスエンジニアリング
		機器部門	優秀賞（個人）	家屋内専用6輪型車いす	宮本 晃・他６名
		機器部門	クリエイト賞	（上肢障害者用）万能ホーム固定器	加藤源重、加藤幸雄
		機器部門	生活アイデア賞	ピッチン！パッチン！らくちんばさみ	金沢 聖紅
		ユーザー部門	ユーザー賞	（排便後の陰部洗浄に使用する手持ちシャワーと洗浄刷毛の制作）	野口 今朝男
		ユーザー部門	ユーザー賞	（脳性マヒ・頸椎損傷者が考案、工夫した、自立・介助低減のための6つの方法）	広畑 豊
		ユーザー部門	便利工夫賞	（片手用爪切り）	貝原 堅治
		ユーザー部門	ファミリー賞	（脳性マヒ小児用ウォーカー）	片村 幸大
1996	福祉機器コンテスト'96	機器部門	優秀賞（企業）	簡易昇降便座	東陶機器株式会社レブリス推進部
		機器部門	優秀賞（個人）	マグウォーカー	甲斐 守・他３名
		機器部門	優秀賞（個人）	フォーピーボール	檜山 忠
		ユーザー部門	ユーザー賞	（アテトーゼを克服して絵画（CG）制作）	原田 華代
		機器部門	佳作	クッションチェア21	株式会社無限工房
		機器部門	佳作	はけるゾウ	高塩 純一・他３名
		機器部門	佳作	おっとテレビ君	南 浩一
		ユーザー部門	佳作	（失われた右手指に代わる補助具の開発）	加藤 源重
		ユーザー部門	佳作	（開きにくい単行本等を読める書見台の考案）	渡部 薫

企業・研究グループの部を、企業・研究 G の部と表示

年	コンテスト名	部 門	賞 名	作品名	受賞者
1997	福祉機器コンテスト'97	機器開発部門(企業・研究 G の部)	最優秀賞	直進くん	丸石自転車株式会社
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	らくらくおむつ交換器	石川 成道
		機器活用部門(個人の部)	最優秀賞	(創作童話を1入力コンピュータによって実現)	藤松 直樹
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	よみとも	タウ技研株式会社
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	C.W.U.(クリーン・ホイール・アーバン)	株式会社成和テクニカ
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	キレッチャー	田中 実香・他２名
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	食事介助ロボット	嶋尾 秀昭
		機器活用部門(個人の部)	優秀賞	(排泄のために工夫した車椅子"ベンリーカー")	小林 平男
		機器活用部門(施設・団体の部)	優秀賞	(仰臥位姿勢保持具キャンディキャンディ)	京都府立与謝の海養護学校 訓練部
1998	福祉機器コンテスト'98	機器開発部門(企業・研究 G の部)	最優秀賞	りーだぶる (ページめくり機)	ダブル技研(株)
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	ひょっこり杖 (立ったままで拾える杖)	長谷部光昭
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	ウィブケア(Wib Care) (注水式排便促進補助具)	富士テクノ(株)
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	95Reader Version 2.0 (Window95 画面及び電子出版物読上げソフト)	(株)ｼｽﾃﾑｿﾘｭｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ とちぎ・他
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	身楽流(ミラクル)木彫りセット (彫刻刀、作業台)	(株)三木章刃物本舗・他
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	タッチガイド(視覚障害者用タッチ式 ATM 操作ガイド板)	小泉 暁美
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	階段用介護車 (階段を昇降できる介護車)	麻生 健
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	すいすい AUTOMATIC あんくる (水泳用足継手)	木村 義和
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	ワンタッチ式片手でも編み物できるんだーい・片手でも編み物できるんだーい (片手用編み針固定台)	村松郁惠、村松精一
		機器活用部門(個人の部)	最優秀賞	(パソコンを活用し、積極的な社会参加活動を行う)	山田 真己
1999	福祉機器コンテスト'99	機器開発部門(企業・研究 G の部)	最優秀賞	おいしい包丁 (柄角度調整可能な包丁)	(株)三木章刃物本舗・他
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	ゆびじょ (ボタン着脱用自助具)	橋本 三重子
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	シーティング・バギー (重度身体障害者用介護型車いす)	北海道立心身障害者総合相談所
		機器開発部門(企業・研究 G の部)	優秀賞	キャロット (障害児のためのチャイルドシート)	(有)シーズ・他
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	車椅子の多機能ブレーキ (逆進防止機能等が付いたブレーキ)	加藤 源重
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	ワンタッチシェーバー (重度四肢麻痺者用髭剃機)	嶋尾秀昭、宮野秀樹
		機器活用部門(個人の部)	最優秀賞	(歩行器を改造した立位姿勢保持装置を考案し、作業用椅子として活用)	岡 秀樹
		機器活用部門(個人の部)	優秀賞	(市販の電動物干しを低く竿が下りるよう工夫し、家事労働の軽減を図っている)	小野 玲子
		機器活用部門(施設・団体の部)	優秀賞	(歩行器を改造した前傾姿勢保持型歩行器を考案、移動機能の向上のアプローチを進める)	京都府立与謝の海養護学校

2000	福祉機器コンテスト 2000	機器開発部門(企業・研究 Gの部)	最優秀賞	よむよむ（視覚障害者用音声情報出力装置）	(株)フェルモ
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	おりづるハンガー（片手操作物干しハンガー）	八田 桂秀
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	車椅子セーフティシステム （車椅子の逆転および加速防止装置）	(株)ヘッズ
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	たのしいシャワー（手元調節型シャワー）	(株)クメテック・他
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	お助けマン清君 （片手洗いのための食器洗い自助具）	小室 雅彦
		機器活用部門(施設・団体の部)	優秀賞	(パソコンを使い、話の内容を楽しく理解・確認できるよう視覚シンボルを学内行事などで活用)	香川大学教育学部附属養護学校
2001	福祉機器コンテスト 2001	機器開発部門(企業・研究 Gの部)	最優秀賞	カラートーク	(株)北計工業
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	ガッチリ手すり浴槽用	東光機材(株)・他
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	ハートチャット	国際電業(株)
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	パットール	土肥 実夫
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	プールフィット	太田 博巳
		機器開発部門(学生の部)	優秀賞	Re:Cycle	金井 謙介
2002	福祉機器コンテスト 2002	機器開発部門(企業・研究 Gの部)	最優秀賞	神戸ミニヤード	(有)ノヴァ研究所・他
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	リムロック	(株)ユタカ電子製作所
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	楽椅子	異業種交流グループ“PINGO”
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	ラクリーナ	関 晴夫
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	靴ポン具	土肥 実夫
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	らくらく包丁	山口 良二
		機器開発部門(学生の部)	優秀賞	目でサイン i・sign	宮坂 智哉
		機器開発部門(学生の部)	優秀賞	ブレイルウォッチ	有本 繁弘
		機器活用部門(一般の部)	優秀賞	おしり拭きの工夫と活用	水谷 和子
		機器活用部門(施設・団体の部)	優秀賞	在宅ケアでのテレビ電話の活用(もしもしケアサービス)	矢本ホームケアサービス
2003	福祉機器コンテスト 2003	機器開発部門(企業・研究 Gの部)	最優秀賞	ワイヤレスホームコール	アイホン株式会社
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	脳活性化ゲーム・シリーズ	岩月脳活性化デザイン研究所
		機器開発部門(企業・研究 Gの部)	優秀賞	グリップトーン(にぎってドレミ)	国際電業(株)
		機器開発部門(一般の部)	最優秀賞	「できマウス。」と「できマウス。」の仲間たち	町田 健治
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	楽ちーん台	大石芳宏、土肥実夫
		機器開発部門(一般の部)	優秀賞	わっふっふ(輪浮布)	赤嶺 秀美
		機器開発部門(学生の部)	最優秀賞	くっつかないで	平田 理恵
		機器活用部門(個人の部)	最優秀賞	スイッチ利用による環境制御とコミュニケーションの拡大	横道 智恵子
		機器活用部門(個人の部)	優秀賞	おべんとうマウス(ソフトタッチマウス)の活用	稲田 勤
		機器活用部門(施設・団体の部)	最優秀賞	かいじゅうのたまご	北九州市立総合療育センター
		機器活用部門(施設・団体の	優秀賞	活動性を向上させるための工夫	京都府与謝の海養護学

		部）		（スリートライの活用）	校
2004	福祉機器コンテスト 2004	機器開発部門（企業・研究 G の部）	最優秀賞	ピエゾ・ニューマティック・センサースイッチ（PPS スイッチ）	川村義肢（株）事業推進本部
		機器開発部門（企業・研究 G の部）	優秀賞	かおマウス	有限会社ストラトゲイト
		機器開発部門（企業・研究 G の部）	優秀賞	どこでもルーペ	（株）インフォメーションヒーローズ
		機器開発部門（一般の部）	最優秀賞	ウィリー（車いすの前輪キャスターを浮かせ、雪道の移動介助を容易にする）	菅 正
		機器開発部門（一般の部）	優秀賞	ワンスイッチ電動車椅子用コントローラ：ハミングコントローラ	青木 久
		機器開発部門 （学生の部）	最優秀賞	mimi-color	南里 陽介
		機器活用部門	最優秀賞	「ロボットアーム・プロジェクト！！～みんなでつくる巨大絵画～」	北海道八雲養護学校
		機器活用部門	優秀賞	ボーリングシュート台	北九州市立総合療育センター
		機器開発部門（学生の部）	選考委員長特別賞	（機器開発部門学生の部にクラス単位で計8件の応募を行った）	鹿児島県指宿市立西指宿中学校3年1組、2組
2005	福祉機器コンテスト 2005	機器開発部門	最優秀賞	電動車いす使用者のためのボウリング補助具（Perfect Bowler りつこさん）	篠原 勇
		機器開発部門	優秀賞	ＰＣＳＳ（Posture Control Support System）と Multilocomotor	高塩 純一
		機器開発部門	優秀賞	垂直リフト「チョータくん」	河原 守
		機器開発部門	優秀賞	アイスピックワンタッチ収納式冬季用杖	敦賀 健志
		学生部門（高校・工業高等専門学校の部）	優秀賞	立ち上がり介助システム	野津 史朗、曾田 真史、山根 利佳
2006	福祉機器コンテスト 2006	機器開発部門	最優秀賞	パーフェクトリーチャー「つかむ君」	上野 清見
		機器開発部門	優秀賞	凸字点字器	草場 蓼
		機器開発部門	優秀賞	持続保温機能をもった「色がかんたんにわかるくつ下」	新宅 光男
		学生部門（大学・専門学校の部）	最優秀賞	フプーン	福井 泰史
		学生部門（大学・専門学校の部）	優秀賞	アイキャッチ	笠原 このみ
		学生部門（大学・専門学校の部）	優秀賞	簡易型電動車いす	楠木 裕也・他２名
2007	福祉機器コンテスト 2007	機器開発部門	最優秀賞	F-Knee （随意制御型 多軸膝継手）	四丸 聖康
		機器開発部門	優秀賞	D800iDS	中村 吉伸・他４名
		機器開発部門	優秀賞	転倒予防靴下	新宅 光男・他1名
		機器開発部門	優秀賞	ユニバーサルデザインスクリーンリーダーxpNavo	新城 直・他１名
		学生部門（大学・専門・高専の部）	最優秀賞	線上ランナー☆	笠原 拓也・他４名
		学生部門（大学・専門・高専の部）	優秀賞	いつでも、どこでも『おむすびスルリン』	垣内 彩子・他２名
		学生部門（小・中・高校の部）	特別賞	（2 学年全員（261 名）で、コンテストに取り組み、13 件の応募中 5 件が一次選考を通過）	名古屋市立高針台中学校
		学生部門（小・中・高校の部）	奨励賞	レーダーめがね 超音波物体検出メガネ	片瀬 佑記
2008		機器開発部門	最優秀賞	自己導尿用陰唇開大器	玉垣 努
		機器開発部門	優秀賞	片手で出来る、鍋洗いの補助具	明石 一彌

2008	福祉機器コンテスト 2008	機器開発部門	優秀賞	導尿用ショーツ	柴田恵美、土屋瑞枝
		機器開発部門	特別賞	自走用シャワーチェア sarasvati	吉田　茂雄
		機器開発部門	特別賞	SDオーディオコントローラー レッツ・サウンド	松尾　光晴
		学生部門(大学・専門・高専の部)	最優秀賞	GIVENESS ユニット -あなたにあわせて変えられる頸椎装具-	須賀　じゅん
		学生部門(大学・専門・高専の部)	優秀賞	車いす用バックビューモニタ	乾　裕彦
		学生部門(大学・専門・高専の部)	優秀賞	～収納式簡易車いす用テーブル～ 『テーぐるんℓ』	徳山　康秀
		学生部門(小・中・高校の部)	優秀賞	焼きそば湯切り風呂	仙台市立六郷小学校 6年3組
		学生部門(小・中・高校の部)	優秀賞	ピンボール	幸坂　彬代
2009	福祉機器コンテスト 2009	機器開発部門	最優秀賞	薬剤オープナー	向原　誠
		機器開発部門	優秀賞	座面昇降型リクライニング式車いす『NEXTROLLER(ネクストローラー)』	芝崎　泰造
		機器開発部門	優秀賞	Transfer Aid（トランスファー　エイド）	小宮　雅美
		学生部門	最優秀賞	（該当者なし）	
		学生部門(大学・専門・高専の部)	優秀賞	らくらくスポンジ	奥山　梨央
		学生部門(大学・専門・高専の部)	優秀賞	凸凹盤面チェスセット	SOSA　SAN ROMAN MIGUEL
		学生部門(大学・専門・高専の部)	優秀賞	はいぱーすかうたーZ -目だけで伝える言葉-	菅嶋建佑・他２名
2010	福祉機器コンテスト 2010	機器開発部門	最優秀賞	Vela	中山　宜久・他３名
		機器開発部門	優秀賞	片手でも食べられる食事の補助具「ステーキ　ホルダー」	明石　一彌
		機器開発部門	優秀賞	車いす用ゲーム補助入力装置　ウィール・バランス・ボード「ノッテコン」シリーズ	井手　將文
		機器開発部門	優秀賞	ファブリックスポークカバー	山崎　秀夫
		学生部門	最優秀賞	ボタンどめ	平川　慶典
		学生部門	優秀賞	改良型ソックスエイド	吹野　健太
		学生部門	優秀賞	ivy	森田　真平
2011	福祉機器コンテスト 2011	機器開発部門	最優秀賞	車椅子用酸素カートキャリア	加藤　源重
		機器開発部門	優秀賞	ボウリングゲーム用　オートスロープ	上野　忠浩・他３名
		機器開発部門	優秀賞	ギター演奏支援自助具　響楽(きょうらく)	矢野　賢一・他５名
		学生部門	最優秀賞	ポッチ	北村　有希子・他４名
		学生部門	優秀賞	STOP pon（ストッポン）	近藤　ま波
		学生部門	優秀賞	エアーフォース1	瀧　晃太・他３名
2012	福祉機器コンテスト 2012	機器開発部門	最優秀賞	マルチ ホールド スーパー	深澤 剛、深澤 孝子
		機器開発部門	優秀賞	電動車いすサッカーを簡単に楽しむための簡易フットガードシリーズ『プラ・ダンボ・TANKmini・TANK』	中村詩子、金丸 夕貴
		機器開発部門	優秀賞	曲がるキーボードスタンド	中川翔次、松田健太
		機器開発部門	特別賞	『バイオリン・アダプター』	明石　一彌
		学生部門	最優秀賞	ハンド君弐号機	澁谷 怜・他３名
		学生部門	優秀賞	コエミエール	山本裕喜、下村英之
		学生部門	優秀賞	「つかむ」ことができるマジックハンド	影山 暁
2013	福祉機器コンテスト 2013	機器開発部門	最優秀賞	Stalk2(エストークツー)	稲村駿、廣冨哲也
		機器開発部門	優秀賞	ふきん絞り器 ≪絞るチャン≫	栗田　昌弘
		機器開発部門	優秀賞	ジョイスティック操作式自動車運転アドオンシステム	和田正義、亀田藤雄、

2013	福祉機器コンテスト 2013				斎藤征道
		学生部門	最優秀賞	（該当者なし）	
		学生部門	優秀賞	アルジャーノンに花束を	植椙　陸・他３名
		学生部門	優秀賞	折りたたみ式フットプレート	福澤　優、元島俊幸
2014	福祉機器コンテスト 2014	機器開発部門	最優秀賞	JINRIKI、JINRIKIQUICK	中村　正善
		機器開発部門	優秀賞	ポータブル手動運転装置（ハンドコントロール）	神村　浩平
		機器開発部門	優秀賞	キャスパー　ZAFU　ベーシック	西本　伸之
		学生部門	最優秀賞	視覚障害者も利用可能なバリアフリーゲーム　Shadow Rine　～Fullvoice Edition	松尾政輝、中尾清隆
		学生部門	優秀賞	まわるランチプレート	高橋　和希・他２名
		学生部門	優秀賞	ネックレスホルダー	荒牧　初
2015	福祉機器コンテスト 2015	機器開発部門	最優秀賞	手であが～る	落合　明彦
		機器開発部門	優秀賞	クロス Y ベルト	酒井　敏光
		機器開発部門	優秀賞	市販の視線入力装置を活用した、四肢が不自由な重度身体障害者向けパソコン操作システム「miyasuku EyeCon」	中島　勝幸
		学生部門	最優秀賞	Eye Mot～ローコスト視線入力装置利用の視線入力訓練ソフトウェア～	横田光弘、金子和弘
		学生部門	優秀賞	打てるんです	藤原 峻輔・他２名
		学生部門	優秀賞	にぎレバ	伊藤 あこ・他４名
2016	福祉機器コンテスト 2016	機器開発部門	最優秀賞	すららとぱっくん	松田健太　一木愛子
		機器開発部門	優秀賞	自動車用体幹サポートクッション『ユニバケ』	佐藤正樹
		機器開発部門	優秀賞	坐るをサポートする椅子『レポ・ジュニア』	竹野節子
		学生部門	最優秀賞	のばしたカッターハンド	佐々木美里　澤谷歩
		学生部門	優秀賞	ブックハンド	川原徹朗
		学生部門	優秀賞	あけれる君	今貴史　・他2名
2017	福祉機器コンテスト 2017	機器開発部門	最優秀賞	小児用車いす『Hello!』	佐々木康尊
		機器開発部門	優秀賞	ふわふわフィットパンツ	西浦伸忠
		機器開発部門	優秀賞	コミュニケーションボード『フリッキー』	松本亜砂子
		学生部門	最優秀賞	SMA 患者の為の電動ストレッチャー	仲野翔紀・他5名
		学生部門	優秀賞	片手でおまかせ！ぶんぐくん	志井田はな・他３名
		学生部門	優秀賞	ボルダリング専用義手	林諒一郎・他2名
2018	福祉機器コンテスト 2018	機器開発部門	最優秀賞	子ども用白杖	株式会社キザキ
		機器開発部門	優秀賞	『にぎるっ茶』	山梨宏之
		機器開発部門	優秀賞	腰を浮かせる腰痛軽減装具”フワット“	中山功一
		機器開発部門	30 周年記念特別賞	麻痺した側の手の爪切り台	田村正文
		学生部門	最優秀賞	何でも乗る CAHT-障がい児用電動台車－	田中智也
		学生部門	優秀賞	翔北カーリングゲーム	大友陽平
		学生部門	優秀賞	スイッチ評価ツール	小塩暁
		学生部門	30 周年記念特別賞	IH ソレこんろじゃけん	寺朋哉
2019	福祉機器コンテスト 2019	機器開発部門	最優秀賞	お風呂ネット『湯らりん』	的場千賀子
		機器開発部門	優秀賞	ロック機能付きリーチャー	上野清見

2019	福祉機器コンテスト 2019	機器開発部門	優秀賞	ハンモックベッド	宮原慎吾　岩下大志
		学生部門	最優秀賞	Freview(フリビュー)	五十嵐俊治
		学生部門	優秀賞	スルっと！とめまるくん	冨樫莉菜
		学生部門	優秀賞	水圧アクチュエータを用いた対向3指義手	山中佑真
2021	福祉機器コンテスト 2021	機器開発部門	最優秀賞	一指や足でもスイスイ演奏！スライドリコーダー	大坪武廣
		機器開発部門	優秀賞	Protect ロッカー『おもいやりロッカー』	齋藤博隆
		機器開発部門	優秀賞	高齢者向け音楽療法用オリジナ『良くなる子』	今井竜彦
		学生部門	最優秀賞	毛玉(KEDAMA)	呉江
		学生部門	優秀賞	ボッチャボール回収ロボット	竹本和馬
		学生部門	優秀賞	子ども用3D プリント長下肢装具	五味瑞季
		学生部門	優秀賞	それってもしかして －思い出伝言ゲーム－	男鹿谷惣
2022	福祉機器コンテスト 2022	機器開発部門	最優秀賞	触地図作成キット	豊田航
		機器開発部門	優秀賞	TIRI のストロー補助具	酒井日出子
		機器開発部門	優秀賞	HeartyHID24Mouse	植田友貴
		学生部門	最優秀賞	アイスポッターデラックス －棒アイスを持ち易く、服を汚さず、口に運び易くなる自助具－	江口直香
		学生部門	優秀賞	究極のインクルーシブゲーム －心拍を活用した運動会－	奥井大貴
		学生部門	優秀賞	点字ロール	小林芽生
2023	福祉機器コンテスト 2023	機器開発部門	最優秀賞	松葉杖サポートエプロン『ツエプロン』	角住由美
		機器開発部門	優秀賞	スマートフットレスト	敷地雄一
		機器開発部門	優秀賞	COLORS®	鈴木健介
		学生部門	最優秀賞	(該当者なし)	
		学生部門	優秀賞	おでかけ学習装置にぎるん	池田怜生･他 3 名
		学生部門	優秀賞	もけもけ君5号 －立ったまま種まきができる自助具	濵田大暉･他 3 名
		学生部門	特別賞	Micro 耳 it	山下桃子
2024	福祉機器コンテスト 2024	機器開発部門	最優秀賞	歩行筋サポートギア e-foot･futto	山田好洋　山田悦世
		機器開発部門	優秀賞	Lee ポップマット	酒井敏光
		機器開発部門	優秀賞	リモコンエール	松尾光晴
		学生部門	最優秀賞	坂上とまる麻呂－ホール素子を用いた介助式車椅子の自動ブレーキ－	成瀬有里･他 6 名
		学生部門	優秀賞	みんなで楽しもう『VR チェアスキー』	小枝瞭介･他 3 名
		学生部門	優秀賞	見つかる！くつくっつくん	吉村結･他 2 名
2025	福祉機器コンテスト 2025	機器開発部門	最優秀賞	スマホリング＋キャップオープナー	三野宏
		機器開発部門	優秀賞	片手でゴミ袋の口を縛るロープ	竹中幸彦
		機器開発部門	優秀賞	コネクトエール	松尾光晴
		学生部門	最優秀賞	カイ　包装紙オープナー	村田世菜
		学生部門	優秀賞	傘しまうくん	浅石穂香
		学生部門	優秀賞	SPRO(Selfish Pretty RObot)－充電できない不便なロボット－	藤澤美結

受賞された皆さまおめでとうございました。

福祉機器コンテストチラシ

過去　受賞作品

福祉機器コンテスト過去後援団体・協賛企業一覧

回	年度	後援団体	協賛企業	事務局	主催
1	1989	厚生省、東京都ほか	㈱スズケン （助成）	不明	日本リハビリテーション工学協会
2	1990	不明 （おそらく厚生省）	㈱スズケン	不明（たぶん東京都社会福祉総合センター・小島操）	日本リハビリテーション工学協会
3	1991	厚生省、全国社会福祉協議会、東京都	㈱スズケン （助成）	不明	日本リハビリテーション工学協会
4	1992	厚生省、全国社会福祉協議会、テクノエイド協会、 シルバーサービス振興会	フランスベッド株式会社	横浜市総合リハビリテーションセンター（担当：畠山・飯島）	日本リハビリテーション工学協会
5	1993	厚生省、全国社会福祉協議会、テクノエイド協会、 シルバーサービス振興会	フランスベッド株式会社	横浜市総合リハビリテーションセンター（担当：畠山・飯島）	日本リハビリテーション工学協会
6	1994	厚生省、通商産業省、社団法人シルバーサービス振興会、社会福祉法人全国社会福祉協議会、財団法人テクノエイド協会、	フランスベッド株式会社	横浜市総合リハビリテーションセンター企画研究室内（担当：飯島・畠中・鈴木）	日本リハビリテーション工学協会
7	1995	厚生省、通商産業省、 全国社会福祉協議会、 テクノエイド協会、 シルバーサービス振興会	フランスベッド株式会社	総合せき損センター医用工学研究室内	日本リハビリテーション工学協会
8	1996	厚生省、通商産業省、 全国社会福祉協議会、 テクノエイド協会、 シルバーサービス振興会	フランスベッド株式会社	総合せき損センター医用工学研究室内	日本リハビリテーション工学協会
9	1997	厚生省、通商産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、 財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構	フランスベッド株式会社	兵庫県立 福祉のまちづくり工学研究所内	日本リハビリテーション工学協会
10	1998	厚生省、通商産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、 財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）	フランスベッド株式会社	徳島大学大学院 エコシステム工学専攻 人間適応工学研究室内	日本リハビリテーション工学協会
11	1999	厚生省、通商産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、 財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）	フランスベッド株式会社	徳島大学大学院 エコシステム工学専攻 人間適応工学研究室内	日本リハビリテーション工学協会
12	2000	厚生省、通商産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、 財団法人テクノエイド協会、 新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）	フランスベッド株式会社	徳島大学大学院 エコシステム工学専攻 人間適応工学研究室内	日本リハビリテーション工学協会

13	2001	厚生労働省、経済産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)	フランスベッド株式会社 フランスベッド・メディカルサービス株式会社	なごや福祉用具プラザ内	日本リハビリテーション工学協会
14	2002	厚生労働省、経済産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)	フランスベッド・メディカルサービス株式会社	なごや福祉用具プラザ内	日本リハビリテーション工学協会
15	2003	厚生労働省、経済産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、財団法人テクノエイド協会、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)	フランスベッド・メディカルサービス株式会社	なごや福祉用具プラザ内	日本リハビリテーション工学協会
16	2004	厚生労働省、経済産業省、社会福祉法人全国社会福祉協議会、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)	フランスベッド・メディカルサービス株式会社	社会福祉法人大阪市障害者福祉・スポーツ協会 大阪市職業リハビリテーションセンター　援助技術研究室内	日本リハビリテーション工学協会
17	2005	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、 日本福祉用具・生活支援用具協会	フランスベッド・メディカルサービス株式会社	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会
18	2006	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、 日本福祉用具・生活支援用具協会	フランスベッド・メディカルサービス株式会社	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会
19	2007	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド・メディカルサービス株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会
20	2008	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、 社団法人日本作業療法士協会	特別協賛＞ フランスベッド・メディカルサービス株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会
21	2009	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会

22	2010	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、 日本福祉用具・生活支援用具協会、社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー	有限会社車座内	日本リハビリテーション工学協会
23	2011	厚生労働省、経済産業省、財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、 株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー	別府リハビリテーションセンター内	日本リハビリテーション工学協会
24	2012	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、 株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー	別府リハビリテーションセンター内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
25	2013	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー、川村義肢株式会社	別府リハビリテーションセンター内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
26	2014	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー、 川村義肢株式会社、株式会社有薗製作所	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
27	2015	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)、日本福祉用具・生活支援用具協会(JASPA)、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、 株式会社松本義肢製作所、東名ブレース株式会社、株式会社今仙技術研究所、株式会社モリトー、川村義肢株式会社、 株式会社有薗製作所、 日陶科学株式会社	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会

28	2016	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、日本福祉用具・生活支援用具協会（JASPA）、 一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、 株式会社今仙技術研究所、川村義肢株式会社、 株式会社ケープ、日陶科学株式会社、株式会社ミクニライフ＆オート、株式会社モリトー	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
29	2017	経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、日本福祉用具・生活支援用具協会（JASPA）、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、川村義肢株式会社、株式会社ケアフォース、株式会社ケープ、日陶科学株式会社、株式会社ミクニライフ＆オート、株式会社モリトー	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
30	2018	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、川村義肢株式会社、株式会社ケアフォース、株式会社ケープ、日陶科学株式会社、株式会社ミクニライフ＆オート、株式会社モリトー	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
31	2019	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、日本福祉用具・生活支援用具協会（JASPA）、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、川村義肢株式会社、株式会社ケープ、日陶科学株式会社、株式会社ミクニライフ＆オート、株式会社モリトー	有限会社車座内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
―	2020	新型コロナウイルス感染症拡大にて中止			
32	2021	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、日本福祉用具・生活支援用具協会（JASPA）、一般社団法人日本作業療法士協会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社ケープ、株式会社有薗製作所	神奈川リハビリテーション病院　研究部内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
33	2022	厚生労働省、経済産業省、公益社団法人テクノエイド協会、公益社団法人日本理学療法士協会、公益社団法人日本生体医工学会、公益社団法人計測自動制御学会、一般社団法人日本作業療法士協会、一般社団法人日本義肢装具学会、一般社団法人日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、株式会社ケープ、日本 3D プリンター株式会社	神奈川リハビリテーション病院　研究部内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会

		法人日本車椅子シーティング協会、一般社団法人日本生活支援工学会、一般社団法人日本福祉のまちづくり学会、バイオメカニズム学会、一般社団法人日本人間工学会、特定非営利活動法人バイオフィリアリハビリテーション学会			
34	2023	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、公益社団法人日本生体医工学会、公益社団法人日本理学療法士協会、一般社団法人日本義肢装具学会、一般社団法人日本車椅子シーティング協会、一般社団法人日本作業療法士協会、一般社団法人日本生活支援工学会、一般社団法人日本人間工学会、一般社団法人日本福祉のまちづくり学会、一般社団法人日本福祉用具・生活支援用具協会、特定非営利活動法人バイオフィリアリハビリテーション学会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社有薗製作所、株式会社ケープ、株式会社フロンティア、日本 3D プリンター株式会社	神奈川リハビリテーション病院　研究部内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
35	2024	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、公益社団法人日本理学療法士協会、公益社団法人日本生体医工学会、公益社団法人計測自動制御学会、一般社団法人日本作業療法士協会、一般社団法人日本義肢装具学会、一般社団法人日本車椅子シーティング協会、一般社団法人日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団法人日本生活支援工学会、一般社団法人日本福祉のまちづくり学会、一般社団法人日本人間工学会、バイオメカニズム学会、特定非営利活動法人バイオフィリアリハビリテーション学会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社フロンティア、株式会社ケープ、日本 3D プリンター株式会社	神奈川リハビリテーション病院　研究部内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
36	2025	厚生労働省、経済産業省、公益財団法人テクノエイド協会、公益社団法人日本理学療法士協会、公益社団法人日本生体医工学会、公益社団法人計測自動制御学会、公益社団法人日本義肢装具士協会、一般社団法人日本作業療法士協会、一般社団法人日本義肢装具学会、一般社団法人日本福祉用具・生活支援用具協会、一般社団法人日本車椅子シーティング協会、一般社団法人日本生活支援工学会、一般社団法人日本福祉のまちづくり学会、一般社団法人日本人間工学会	＜特別協賛＞ フランスベッド株式会社 ＜協賛＞ 株式会社フロンティア、株式会社ケープ、日本 3D プリンター株式会社	神奈川リハビリテーション病院　研究部内	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会

多大なるご支援ありがとうございました。

協会のあゆみ④　役員経験者

協会役員経験者一覧 1989～2026

（順不同・敬称略）

○旧役員（団体）
理事長：末田統、市川洌、田中理、松尾清美

理事：伊福部達、田中理、畠山卓朗、山本敏泰、奥英久、森本正治、井手将文、相川孝訓、江原義弘、繁成剛、清宮良昭、関宏之、荒井利春、上村数洋、沖川悦三、北風晴司、小島操、土嶋政宏、坊岡正之、松尾清美、光野有次、米崎二朗、伊藤英一、長尾哲男、廣瀬秀行、田中芳則、井上剛伸、黒田大治郎、橋詰努、古瀬喜久、米田郁夫、桂律也、田中繁、井村保、糟谷佐紀、金井謙介、田中栄一、松田靖史、横田恒一、小林博光、相良二朗、麩澤孝、西村重男、川村慶、大鍋寿一、元田英一、鈴木聖貴、飯島浩、岩﨑満男、高原光恵、塚田敦史、巴雅人、古井透、

監事：加藤俊和、田中繁、清宮良昭、関宏之、繁成剛、秋田裕

○旧役員（法人）
会長：田中理、相良二朗、繁成剛、沖川悦三、桂律也、河合俊宏

理事：沖川悦三、金井謙介、相良二朗、大鍋寿一、元田英一、鈴木聖貴、飯島浩、岩﨑満男、川村慶、高原光恵、塚田敦史、巴雅人、古井透、剣持悟、畠中規、水澤二郎、宮野秀樹、山形茂生、石濱裕規、杉本昌子、中村俊哉、吉田泰三、江原喜人、岡野善記、桂律也、鈴木太、麩澤孝、二瓶美里、植田瑞昌、谷口公友、西村顕、村田知之、森田千晶、伊佐拓哲、桂律也、中村詩子、早川康之、山田賀久、北野義明、小島みさお、小林博光、渡辺崇史

監事：井上剛伸、井村保、飯島浩、相川孝訓、赤澤康史、伊藤和幸、水澤二郎

顧問：田中理、相良二朗

事務局：深野栄子（事務局長）、沖川悦三（事務局参与）

○現役員
会長：河合俊宏
副会長：金井謙介、渡辺崇史

理事：一木愛子、植田友貴、植田瑞昌、上野忠浩、北野義明、小島みさお、小林博光、徳田良英、冨田藍、早川康之

監事：伊藤和幸、水澤二郎

顧問：田中理、相良二朗、繁成剛

事務局：深野栄子（事務局長）、沖川悦三（事務局参与）

協会のあゆみ⑤　災害対策委員会
日本リハビリテーション工学協会 災害対策委員会の歩みと活動

一般社団法人日本リハビリテーション工学協会による高齢者・障がい者への災害支援活動は、2011 年の東日本大震災からはじまります。発災直後から現地会員との連携による情報収集や支援活動を開始し、「東日本大震災復興支援に関する専門委員会」として仮設住宅支援や復興支援講習会などを継続して実施しました。これらの経験は、その後の災害支援活動の礎となりました。さらに、2016 年の熊本地震では、発災直後から支援活動を展開し、その経験を踏まえて災害対策委員会が設立されました。2021 年度には協会の常設事業委員会となり、平時の備えから発災後の支援まで対応できる委員会として現在に至っています。

委員会活動は、「平時の啓発」「マニュアル整備」「他団体との連携」の三つを柱としています。平時の啓発では、リハ工学カンファレンスをはじめ、地域イベントなどで災害対策セミナーやワークショップを開催し、避難所生活の課題や障害者支援について情報共有を行うとともに、強化段ボールを用いた災害用トイレや簡易家具の製作体験を通じて、防災・減災に対する理解を深める実践的な活動を継続しています。

マニュアル整備では、一般的な防災知識に加え、高齢者・障がい者へのリハビリテーション工学の専門性を生かした実践的な内容の公開を目指しています。障害特性や災害の種類に応じた平時の備えや避難時の留意点を整理するとともに、関係団体が作成した資料の収集・整理を進め、会員への情報提供体制の構築を目標として、準備を進めています。

また、多職種・他団体との連携にも力を注いでいます。一般社団法人日本災害リハビリテーション支援協会（JRAT）に加盟し、各種委員会やワーキンググループへ委員を派遣するとともに、災害時福祉用具調達支援や支援体制の構築など、リハビリテーション工学の視点を災害支援システムへ反映させる活動を継続しています。

令和 6 年能登半島地震では、現地での JRAT 派遣は困難であったものの、JRAT 中央対策本部でのロジスティクス支援や情報収集、段ボールテーブル・椅子の手配、現地での強化段ボールを用いたワークショップの開催などを実施しました。また、段ボールベッドや移動式車椅子トイレなどの災害対応機器の活用、避難所や在宅避難における生活環境の課題を検証し、リハビリテーション工学が果たすべき役割を改めて確認する機会となりました。

災害対策委員会はこれまで蓄積してきた知見を基に、平時の啓発、発災初期からの支援体制の構築、災害対応機器の評価など、より実践的な活動を目指しています。今後も「誰一人取り残されない防災と減災」の実現に向け、当事者団体や関係機関との協働を進めながら、リハビリテーション工学の専門性を社会へ還元してまいります。

災害対策担当理事

早川　康之

協会のあゆみ⑥　国際連携推進委員会
日本リハビリテーション工学協会 国際連携推進委員会の歩みについて

日本リハビリテーション工学協会（RESJA）の理事の役割の中に初めて「国際」が明記されたのが 2005 年 8 月発行の協会誌「リハビリテーション・エンジニアリング Vol.20 No.2」でした。その時「国際」の仕事は「企画」や「事業」などの役割の中で兼任的な位置付けで担われてきましたが、2009 年 3 月発行の協会誌「リハビリテーション・エンジニアリング Vol.24 No.2」の中で初めて専任の役割として「国際」担当が明記され今日に至っています。

＜国際関連団体との協定締結＞

当協会 RESJA（日本）は、2000 年 8 月に RESNA（北米）、AAATE（欧州）、ARATA（豪州）などの国と地域のリハビリテーション工学協会と相互交流や連携促進を目的として「徳島アグリーメント」を結びました。その後アジア地域の連携を図る目的で徳島アグリーメントの趣旨の発展形として 2011 年 11 月 RESKO（韓国）、2015 年 11 月 TREATS（台湾）と協定を結び相互交流を促進しようとしています。

＜国際組織への加盟＞

また現在当協会 RESJA（日本）は、2020 年 6 月「GAATO（世界支援技術組織同盟）」に、2023 年 8 月「CREATe Asia（アジアのリハビリテーション工学と支援技術連合）」に加盟を表明しました。

「GAATO（世界支援技術組織同盟）」

“支援技術（AT）とリハビリテーション工学（RE）の分野を発展させ、あらゆる年齢層の障害者や機能的制限を持つ人々に利益をもたらすこと”を使命と考え、“共同研究、政策提言、教育、啓発を通じて、支援技術への公平かつ信頼できるアクセスを目指して取り組んでいく”ことを今後の活動方針としています。

「CREATe Asia（アジアのリハビリテーション工学と支援技術連合）」

定期的に“i-CREATe カンファレンス”を開催し、以下に示す 4 項目の実現に向けて活動しています。

1.すべての RE および AT 関係者がリソース、知識、経験を共有できる共通のプラットフォームを提供すること。

2.最終的にはコスト効率が高く、よりアジアに関連した再生住宅・AT 製品の健全なエコシステムを育成すること。

3.国際標準機関と協力し、再生可能・AT 製品に関するアジア関連の標準セットを策定すること。

4.アジア全域で RE および AT ソリューションの研究とイノベーションにおける協力を促進すること。

日本リハビリテーション工学協会は、以上のような協定締結と国際組織に加盟することで国際連携を積極的に促進し、日本国内のみならず世界の人々の支援に携わることができるよう努力して参ります。

国際連携担当理事

上野　忠浩

協会のあゆみ⑦ SIG 内部化

専門性の深化と組織の一体化をもたらした SIG 内部化の歩み

一般社団法人日本リハビリテーション工学協会における SIG（Special Interest Group）の活動は、会員個々の多様な専門性と関心に基づき、リハビリテーション工学の各領域を深く掘り下げ、発展させる原動力として機能してきました。車いす、姿勢保持装置、コミュニケーション支援、住環境、義肢装具など、多岐にわたるテーマごとに組織された SIG は、毎年開催されているリハ工学カンファレンスでの発表やセミナーの開催、情報交換の場として、長年にわたり当協会の学術・実践活動の基盤を支えてきました。

協会が社会的な位置づけを確立するために、全体としてのガバナンスの確保、財務・法的な管理体制の統一、そして何より「協会全体の総合力」を発揮した機動的な社会提言や事業展開を進める上で、SIG の内部化は、組織的に課題となってきました。

こうした背景から、時代の変化と社会からの要請に応えられる強固な組織基盤を構築するため、協会の構造改革に向けた議論が重ねられました。その結実として、創立 40 周年の節目を控えた 2025 年度、それまで個別に活動していた組織も含め、計 10 のすべての SIG が「協会内部の組織」として完全に統合（内部化）されることとなりました。SIG 内部化にご尽力いただいた SIG 担当理事、特に桂律也前会長・副会長・担当理事に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

現在、当協会には、「コミュニケーション SIG」「SIG 姿勢保持」「車いす SIG」「特別支援教育 SIG」「SIG 住まいづくり」「移乗 SIG」「義肢装具 SIG」「乗り物 SIG」「SIG 褥そう防止装置」「自助具 SIG」の 10 の SIG が設置されています。これらはそれぞれの専門性を遺憾なく発揮しながら、協会の常設委員会とも歩調を合わせ、研究・開発・実践のサイクルを力強く回しています。

この SIG 内部化の実現により、協会と各 SIG、あるいは SIG 相互間の連携がこれまで以上に緊密なものとなりました。管理面の効率化にとどまらず、クロスジャンルな研究会の共同開催や、社会ニーズに対する多角的なアプローチなど、組織の一体化によるシナジー効果が早くも生まれつつあります。各分野の尖った専門性を損なうことなく、協会のガバナンスのもとで機動的に活動できる体制が整ったことは、当協会が 40 周年を迎え、更に歩む上で極めて大きなマイルストーンとなりました。

一方で、各 SIG の運営は新たな課題にも直面しています。長年活動を牽引してきたキーパーソンの交代に伴う後継者不足に伴い、新メンバーの確保など、組織を次世代へと持続させていくための基盤づくりが急務となっています。各分野の灯を絶やすことなく、新たな興味・関心を持つ会員が気兼ねなく集まり、活躍できる活発なコミュニティへと再構築していくことが期待されています。

今後も、さらに強固となった組織力を基盤に、会員の知見を結集し、障害者・高齢者の QOL 向上、そして誰もが生き生きと暮らせる共生社会の実現に向けて、リハビリテーション工学の専門性をより広く社会へ還元してまいります。各 SIG への積極的なご参加と、次代を担う皆さまの参画を心よりお待ちしております。

SIG 担当理事

小島みさお

協会のあゆみ⑧ 賛助会員

賛助会員 2026

（順不同）

株式会社今仙技術研究所

株式会社オーエックスエンジニアリング

オットーボック・ジャパン株式会社

日進医療器株式会社

株式会社カワムラサイクル

川村義肢株式会社

株式会社モリトー

東名ブレース株式会社

株式会社松本義肢製作所

中村ブレイス株式会社

株式会社大武・ルート工業

株式会社ミキ

株式会社ライフステップサービス

株式会社ケイアイ

日本リハビリテーション工学協会

＜協会事務局＞
〒235-0033　神奈川県横浜市磯子区杉田 2-7-20
（一社）日本リハビリテーション工学協会　事務局
FAX　：　045-353-8365
http://www.resja.or.jp/

第２版　2026年9月30日